

奈良県北葛城郡広陵町

まるこ山古墳

— 第2次発掘調査報告 —

平成19年（2007年）3月

広陵町教育委員会

奈良県北葛城郡広陵町

まるこ山古墳

— 第2次発掘調査報告 —

平成19年（2007年）3月

広陵町教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成12（2000）年度に広陵町教育委員会が国庫補助事業・県費補助事業として実施した、奈良県北葛城郡広陵町大字広瀬1259-1・1260に所在するまるこ山古墳の範囲確認調査（第2次）の報告書である。
2. 現地調査は、平成13（2001）年2月19日に開始し、同年3月30日に終了した。なお、本書の刊行は、平成18（2006）年度事業として実施したものである。
3. 調査体制：広陵町教育委員会
　　教育長　吉村　崇、社会教育課文化財係長　吉村強二、文化財係技師　井上義光
　　（役職はいずれも当時）
4. 調査担当者：広陵町教育委員会社会教育課文化財係　名倉聰
5. 調査作業員：長谷川隆男・竹村　勝・田村力利・藤本清文・藤本　弘・吉岡藤雄の参加があった（順不同・敬称略）。
6. 調査補助員：久保恵司・西村和也の参加があった（順不同・敬称略）
7. 整理作業及び報告書作成：蒲生玲子・高井美智子・藤村孝子・井上澄子・奥田和代・乾紀美の協力があった（順不同・敬称略）。
8. 図中の座標は日本測地系第IV座標系に基づいており、基準高は東京湾平均海面高を用いている。
9. 土層の色調は、『新版標準土色図』1994年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　（財）日本色彩研究所色票監修）を参考にしている。
10. 遺物写真図版の番号は、遺物実測図番号と同一としている。
11. 本報告は、井上義光の指導及び協力のもと、名倉が執筆・編集を行った。
12. 調査に関する記録、出土遺物等は、広陵町教育委員会において保管している。
13. 現地調査に際して、土地所有者である岡橋　弘氏・中川利一氏にご理解・ご協力をいただいたことを記し、深謝します。

本文目次

例言

1. 調査の契機と経過	1
2. 周辺の地理的・歴史的環境	1
3. 調査の成果	5
4.まとめ	29

挿図目次

図1 まるこ山古墳と周辺遺跡位置図 (1/20000)	2
図2 まるこ山古墳調査区位置図 (1/250)	4
図3 第1調査区遺構平面図・東壁上層断面図 (1/50)	5
図4 第1調査区周濠内遺物出土状況図 (1/20)	6
図5 第2調査区遺構平面図 (1/50)	8
図6 第2調査区北壁十層断面図・土坑203南壁土層断面図 (1/50)	9
図7 第2調査区周濠内遺物出土状況図 (墳丘側 1/20)	10
図8 第2調査区周濠内遺物出土状況図 (中央～東 1/20)	10
図9 第3調査区遺構平面図・東壁土層断面図 (1/50)	11
図10 第3調査区周濠内遺物出土状況図 (1/20)	12
図11 第4調査区遺構平面図・東壁上層断面図 (1/50)	13
図12 第4調査区周濠内遺物出土状況図 (1/20)	14
図13 第4調査区土坑401南壁上層断面図 (1/50)	14
図14 第5調査区遺構平面図・南壁土層断面図 (1/50)	16
図15 第6調査区遺構平面図 (1/50)	17
図16 第6調査区南壁土層断面図 (1/50)	18
図17 第6調査区周濠内遺物出土状況図 (1/20)	19
図18 出土遺物実測図1 (1/5)	21
図19 出土遺物実測図2 (4=1/6 5～12=1/5)	22
図20 出土遺物実測図3 (1/6)	23
図21 出土遺物実測図4 (1/4)	24
図22 出土遺物実測図5 (1/5)	26
図23 出土遺物実測図6 (1/5)	27
図24 出土遺物実測図7 (46～56=1/4 57=1/2)	28

図版目次

- 図版1 航空写真（上が北）
航空写真（東上空から）
- 図版2 調査前状況（南西から）
調査前状況（南東から）
- 図版3 第1調査区 全景（遺構検出時 南から）
第1調査区 周濠内遺物出土状況（東から）
- 図版4 第1調査区 全景（完掘時 南から）
第1調査区 東壁土層断面（北西から）
- 図版5 第2調査区 全景（遺構検出時 西から）
第2調査区 周濠内遺物出土状況（南西から）
- 図版6 第2調査区 周濠内遺物出土状況（南東から）
第2調査区 周濠内遺物出土状況（中央 北から）
- 図版7 第2調査区 全景（完掘時 西から）
第2調査区 南北溝201（南から）
- 図版8 第2調査区 南北溝202（南から）
第2調査区 土坑203南壁土層断面（北から）
- 図版9 第3調査区 全景（遺構検出時 北から）
第3調査区 周濠内遺物出土状況（南西から）
- 図版10 第3調査区 周濠内遺物出土状況（西から）
第3調査区 家形埴輪出土状況（南西から）
- 図版11 第3調査区 家形埴輪出土状況（南東から）
第3調査区 溝301北壁土層断面（南から）
- 図版12 第3調査区 全景（完掘時 北から）
第3調査区 全景（完掘時 南西から）
- 図版13 第4調査区 全景（遺構検出時 北から）
第4調査区 周濠内遺物出土状況（東から）
- 図版14 第4調査区 全景（完掘時 北から）
第4調査区 全景（完掘時 南西から）
- 図版15 第4調査区 土坑401南壁土層断面（北から）
第3・4調査区 全景（完掘時 北西から）
- 図版16 第5調査区 全景（遺構検出時 東から）
第5調査区 全景（完掘時 東から）
- 図版17 第6調査区 全景（遺構検出時 東から）
第6調査区 周濠内遺物出土状況（南東から）

- 図版18 第6調査区 周濠内遺物出土状況（北から）
第6調査区 人物埴輪出土状況（腰部 東から）
- 図版19 第6調査区 人物埴輪出土状況（脚部 北から）
第6調査区 全景（完掘時 東から）
- 図版20 出土遺物 1（形象埴輪）
- 図版21 山上遺物 2（形象埴輪）
- 図版22 出土遺物 3（形象埴輪）
- 図版23 出土遺物 4（形象埴輪）
- 図版24 出土遺物 5（形象埴輪）
- 図版25 出土遺物 6（形象埴輪）
- 図版26 山上遺物 7（円筒埴輪）
- 図版27 出土遺物 8（円筒埴輪）
- 図版28 出土遺物 9（土器・石器）

1. 調査の契機と経過

まるこ山古墳は、奈良県北葛城郡広陵町大字広瀬字マンガに所在する。現状は、葛城川の右岸に広がる田んぼの中に、径11m程の壺形円墳状に残存する。周辺に埴輪片が散在することから墳丘の削平が著しいと考えられた（『奈良県遺跡地図第2分冊』11-C-8）。

平成11年に残存する墳丘の西側が崩落し、この復旧作業に伴う範囲確認調査が実施された（第1次調査）。この調査で水田面下から前方部が検出され、西面する小型の前方後円墳であることが確認された。周濠内からは円筒埴輪の他、鶴形埴輪、蓋形埴輪、人物埴輪等が出土した。

第2次調査はこの調査結果を受けて、古墳の規模を確認するために実施した。

2. 周辺の地理的・歴史的環境（図1）

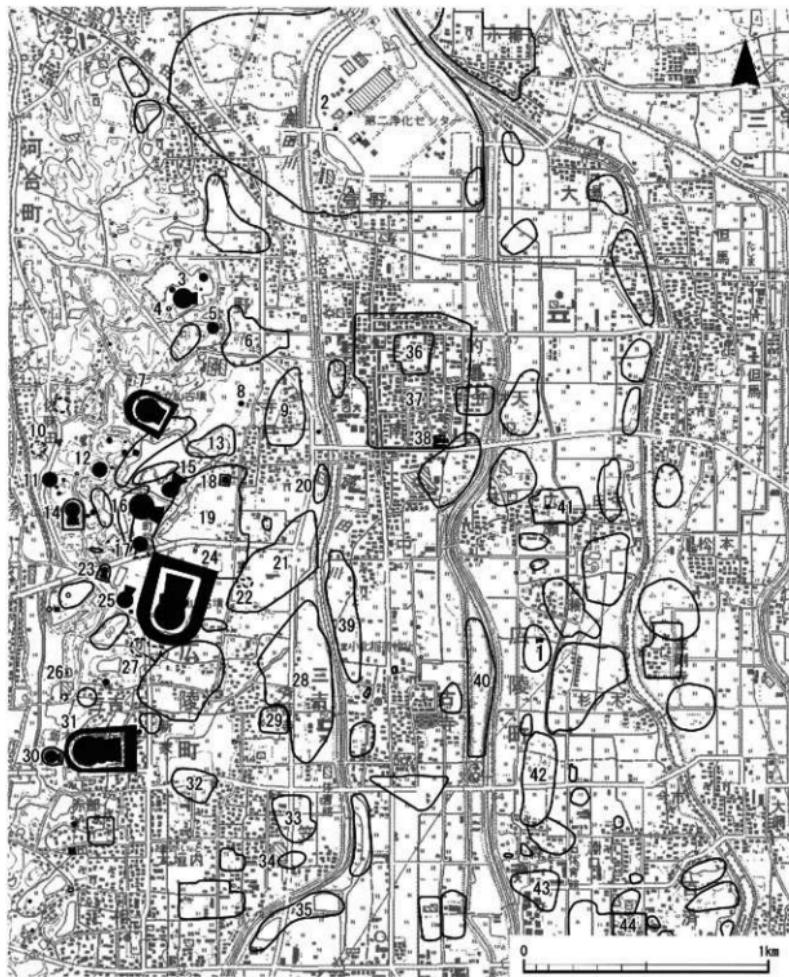
広陵町は、奈良盆地の一角を占める東側の平野部と、馬見丘陵の一部である西側の丘陵地に分かれ。東側の平野部は、町域を南北に流れる高田川・葛城川・曾我川によって形成された沖積平野で、南から北に緩やかに傾斜している。かつては何度も流路の変化、氾濫を繰り返して曲流していたが、現在は河川改修によりほぼ平行して北流している。西側の丘陵地は、第三紀から洪積世の頃に堆積した洪積台地で、南から北に向かって緩やかに傾斜している。丘陵は浸食を受けて谷部が樹枝状に発達し、多くの古墳がその地形を利用して造られている。

広陵町では旧石器時代～縄文時代中期の遺跡は確認されていない。周辺では香芝市の二上山山麓に旧石器時代の遺跡群があり、馬見丘陵南西端でも錦山遺跡が知られている。大和高田市では池田遺跡から大量の後期旧石器時代の石器が出土し、最近の調査で河合町からも旧石器が発見されている。縄文時代草創期・前期の遺跡としては、香芝市瓦口森田遺跡や大和高田市磯野北遺跡が確認され、池田遺跡からも縄文時代草創期～晩期の遺物が出土している。

広陵町では縄文時代後期の遺跡が3ヵ所確認されている。箸尾遺跡（2）は、高田川と葛城川の合流地左岸一帯にある南北に長い微高地上に営まれた縄文時代～中世までの複合遺跡である。縄文時代後・晩期の良好な資料、関東・東北系の土器が出上ることから、この地域の拠点的集落であった可能性がある。馬見丘陵の東斜面、新家長福寺境内周辺で後期の土器片が採集されている他、葛城川左岸に所在する古寺タムロ遺跡（40）では旧流路から後期の土器が出土した。

弥生時代の遺跡は町内で八ヵ所確認されている。箸尾遺跡（2）では縄文時代から引き続いで集落が営まれる。高田川西岸に所在する三吉友田遺跡（28）・ハス遺跡（33）では中期後半の無頸壺や甕が出上し、木殿遺跡（34）からも中期後半の広口壺が出土している。後期になると葛城川東岸に集落が形成される。百濟堂々遺跡（42）では後期の溝を検出し、堀池遺跡（43）周辺では後期の広口壺が出土している。また、まるこ山古墳（1）周辺でも後期の溝を確認している。

古墳時代になると、西側の馬見丘陵に大型の前方後円墳を含む多くの古墳からなる馬見古墳群が形成される。馬見古墳群は北・中央・南の三群に分類される。北群は丘陵北東麓、河合町を中心として展開しており、中期後半の前方後円墳である川合大塚山古墳（全長197m）を中心として、中期末の中良塚古墳（全長88m）、後期前半の川合城山古墳（全長106m）、ル倍塚古墳、川合丸山古墳などで構成される。中央群は、前期後半の別所下古墳（12）・ナガレ山北3号墳（11）などから始まり、巣山古墳（24 全長220m）・新木山古墳（31 全長200m）の大型前方後円墳を中心にナガレ山古墳（14）・一本松古墳（15）・舟塚古墳（16）などの前方後円墳、池上古墳（3）・乙女山古墳（7）・三吉石塚古墳



1 まるこ山古墳	2 箸尾遺跡	3 池上古墳	4 池上木棺墓	5 助主山古墳
6 大野南沿道跡	7 乙女山古墳	8 シドマ塚古墳	9 寺戸鳥掛遺跡	10 佐味田坊塚古墳
11 ナガレ山北3号墳	12 別所下古墳	13 寺戸廢寺	14 ナガレ山古墳	15 一本松古墳
16 谷塚古墳	17 佐味田狐塚古墳	18 文代山古墳	19 寺戸遺跡	20 寺戸遺跡
21 齐音寺遺跡	22 大塚古墳	23 ダダオシ古墳	24 巢山古墳	25 三吉2号墳
26 三吉一番地古墳	27 須岐神社古墳	28 三吉友田遺跡	29 齐音寺跡	30 三吉右塚古墳
31 新木山古墳	32 松ノ下遺跡	33 ハス遺跡	34 木殿遺跡	35 平田遺跡
36 箸尾城跡	37 箸尾環濠	38 横玉媛神社古墳	39 デンフク遺跡	40 古寺タムロ遺跡
41 ドイツカ遺跡	42 百濟堂々遺跡	43 堀池遺跡	44 百济寺	

図1 まるこ山古墳と周辺遺跡位置図 (1/20000)

(30)などの帆立貝式古墳などで構成され、後期には横穴式石室をもつ牧野古墳なども築かれる。南群は、前期の前方後方墳である新山古墳（全長126m）、中期初頭の築山古墳（全長210m）、後期前半の狐井城山古墳を中心として中・小規模古墳で形成される。

古墳時代の集落としては、箸尾遺跡（2）で前期から後期を通じて堅穴住居跡が検出されている。巣山古墳の北側にある寺戸遺跡（19）では後期の堅穴住居跡が検出されている。また、寺戸遺跡東方、高田川東岸のデンフク遺跡（39）では古墳時代の遺構・遺物を検出した。

飛鳥・奈良時代の寺院跡として推定されているものに寺戸廃寺（13）がある。寺戸集落の西方から飛鳥・奈良時代の軒丸瓦が採集され、寺院跡や瓦窯の存在が推定されている。寺戸東遺跡（20）では寺域の東限を示すと考えられる南北方向の構から飛鳥・奈良時代の瓦が大量に出土している。また、三吉3号墳の周濠内から朝鮮半島の瓦を祖形にもつ軒丸瓦が出土している。集落としては、箸尾遺跡（2）・寺戸遺跡（19）・松ノ下遺跡（32）・木殿遺跡（34）・百濟堂々遺跡（42）で奈良時代から平安時代の遺構を多数検出している。

参考文献

- ・広陵町史編集委員会編『広陵町史 本文編』 2001
- ・大和高田市編纂委員会編『改訂大和高田市史 前編』 1984
- ・河合町史調査委員会『河合町史』 1981
- ・香芝町史調査委員会『香芝町史』 1976
- ・井上義光「まるご山古墳」『大和を掘る18』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 2000
- ・前澤郁浩『池田遺跡 奈良県大和高田市遠跡調査報告ダイジェスト』大和高田市教育委員会 2001
- ・松田真・『奈良県の绳文時代遺跡研究』奈良県立橿原考古学研究所 1997
- ・名倉聰「古寺タムロ遺跡」『大和を掘る23』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 2004
- ・中井一大他「広陵町沢・萱野箸尾遺跡調査概報」『奈良県遺跡調査概報1979年』奈良県立橿原考古学研究所 1981
- ・白石太一郎・前園実知雄『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊
奈良県立橿原考古学研究所 1973
- ・井上義光『巣山古墳調査概報』学生社 2005
- ・河上邦彦『史跡牧野古墳』広陵町文化財調査報告第一冊 1987
- ・白石太一郎「広陵町寺」「廃寺とその屋瓦」『青陵』第37号 奈良県立橿原考古学研究所 1978

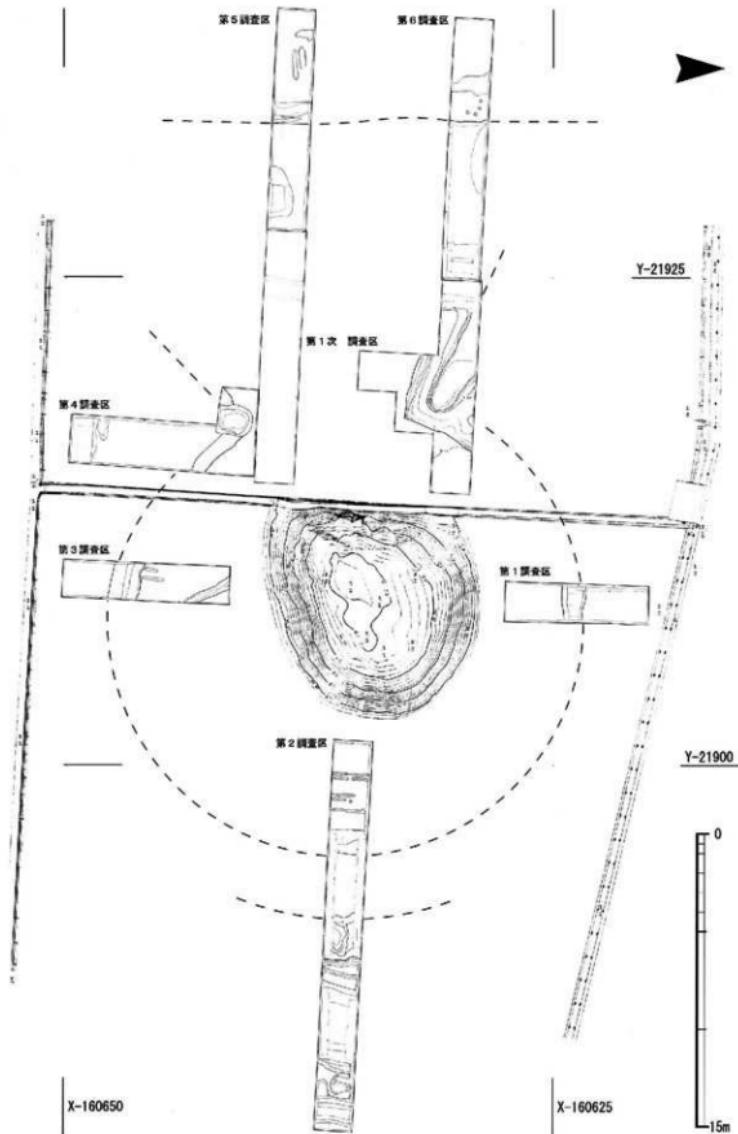


図2 まるこ山古墳調査区位置図 (1/250)

3. 調査の成果

調査は、後円部の残存部北・東・南側に各1ヶ所（第1～3調査区）、前方部は第1次調査の調査区を延長するように2ヶ所（第5・第6調査区）、南側のくびれ部に1ヶ所（第4調査区）の調査区を幅2mで設定して実施した（図2）。

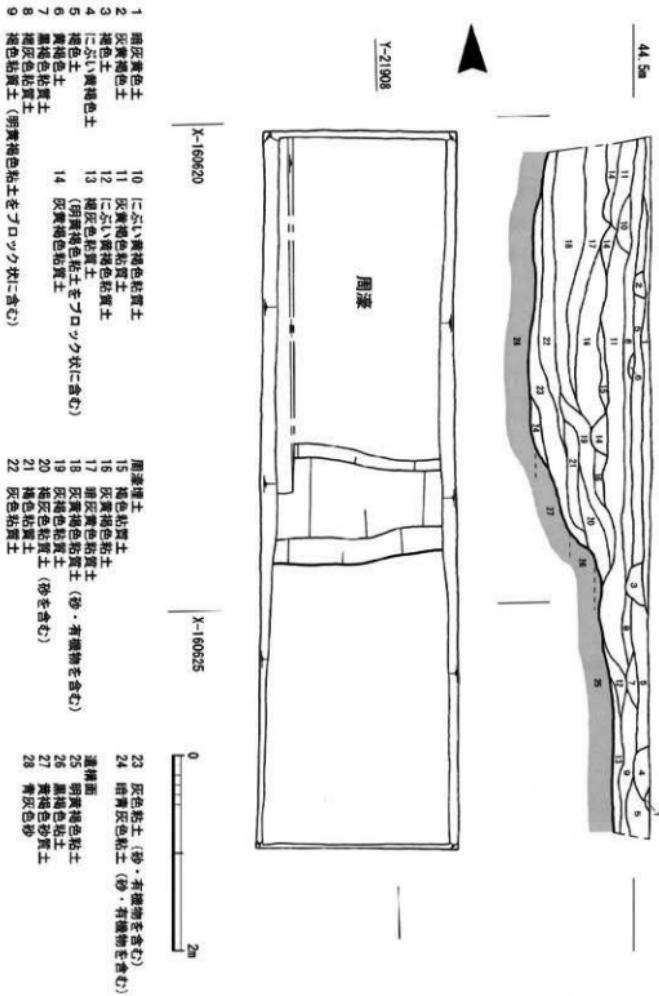


図3 第1調査区遺構平面図・東壁土層断面図(1/50)

1) 第1調査区（図3）

墳丘残存部の北側、推定される墳丘主軸と直交する位置に設定した南北7.3mの調査区である。層序は、耕土・床土の下層に褐色土・褐灰色粘質土・灰黄褐色粘質土が堆積し、現地表下約50cm・標高約44.3mで明黄褐色粘土上の遺構面に達する。この面で古墳周濠を検出した。墳丘は著しく削平を受けしており、盛土等は確認できなかった。

古墳周濠

調査区南端から北側に約2.4m、現状の墳丘裾から約3.7mの位置で検出した。墳丘基底部は標高約43.5mで、墳丘側に約28度の角度で傾斜する。周濠外側の立ち上がりは調査区内では検出しなかった。斜面に葺石はなく、埋土中からも出土しないことから築造当初からなかったと考える。

周濠の深さは現状で約87cmを測り、底部は青灰色砂層の湧水層に達する。埋土は、上層に灰黄褐色粘土・暗灰黄色粘質土・灰黄褐色粘質土・灰色粘質土、下層に砂・有機物を含む灰色粘土・暗青灰色粘土が堆積している。

墳丘斜面から35~60cm程浮いた上層から須恵器、形象埴輪（8・14・16・17・24・25）、円筒埴輪（27~29・32・34）等が出土した（図4）。その他、上層から円筒埴輪（須恵質）、朝顔形埴輪、形象埴輪（15）と共に土師器、須恵器、瓦器挽（55）、瓦質土器、平瓦等が、下層から円筒埴輪片が少量出土した。

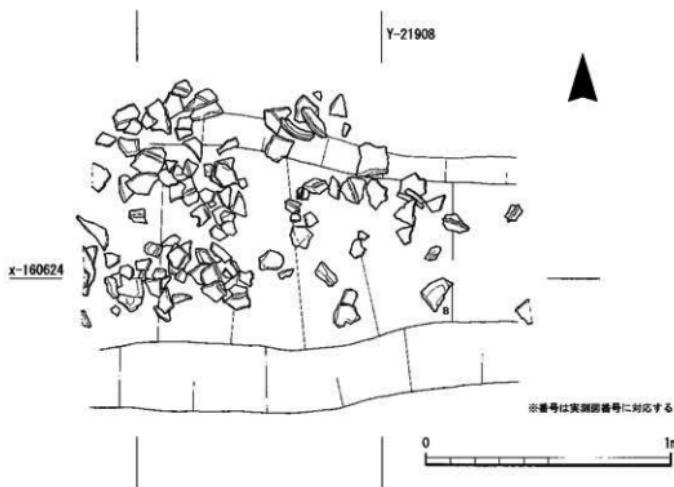


図4 第1調査区周濠内遺物出土状況図（1/20）

2) 第2調査区(図5・6)

墳丘の東側、推定される墳丘主軸方向に設定した東西20mの調査区である。耕土・床上の下層、現地表下約25cm・標高約44.5mで明黄褐色粘土の遭構面に達し、この面で南北方向の素掘り溝の他、古墳周濠、南北溝2条、土坑を検出した。墳丘は水田耕作に伴う削平を受けており、盛土等は確認出来なかつた。

古墳周濠

調査区の西端から約4.55m、現状の墳丘裾から約5.9m東側で検出した。周濠は現状で上幅約6.63m・下幅約3m・深さ約92cmを測る。墳丘基底部は標高約43.8mで、墳丘側には約29度の角度で緩やかに傾斜する。外側は30cm程立ち上がり、幅約2mの緩やかに内傾する面を形成した後、再び角度を急にして立ち上がる。第1調査区と同様、墳丘側・外側の斜面に葺石は検出せず、埋土中からも出土しなかつた。

埋土は上層に褐灰色粘質土・黒褐色粘質土、下層に灰黄褐色粘質土・褐灰色粘質土・オリーブ黒色粘土がほぼ水平に堆積する。周濠底は暗青灰色砂の湧水層に達している。

遺物は墳丘斜面から10~30cm浮いた上層で須恵器、土師器壺・椀(47)等と共に蓋形埴輪(23)等の形象埴輪、円筒埴輪(31・36)、朝顔形埴輪(43~45)が出土した(図7)。その他、上層から家形埴輪(5)、円筒埴輪等と共に土師器、須恵器壺(54)、瓦器、瓦質土器等が、下層からは上師器、須恵器、円筒埴輪片が出土した。中央では底部から40cm程浮いた下層から家形埴輪(6)が出土し、円筒埴輪(30)は、墳丘斜面から中央付近にかけて飛び散った状態で出土している(図8)。

南北溝201

古墳周濠の東側で検出した。平面は北から18度前後東に傾く。断面は底部中央が若干高く残存し、第18層と第20~22層の境界がこの残存部分に繋がることから、第20~22層が堆積後、東側に拡幅して再度開削を行ったと考えられる。拡幅前の規模は、現状で上幅1.7m以上・下幅約70cm・深さ約1.1mを測る。水田耕作に伴う溝と考えられる。

内掘削後の規模は、現状で上幅約4.3m・下幅約1m・深さ約1.1mを測り、断面は大きく開くV字状を呈する。下層に褐灰色粘質土・灰色粘土が堆積した後、上部の併んだ部分を人為的に埋めたと考えられる。溝底は暗青灰色砂の湧水層に達する。

上層から土師器皿・釜、須恵器、瓦器椀、瓦質上器擂鉢(56)、埴輪片(10)、平瓦等が出土し、15世紀には埋没したと考えられる。

南北溝202

南北溝201の東側、調査区東端で検出した。南北溝201とほぼ並行する。断面は逆台形を呈し、規模は現状で上幅約1.8m・下幅約50cm・深さ約85cmを測る。

埋土は暗褐色粘質土・暗灰黄色粘土・黄灰色粘土・灰色粘質土が堆積し、土師器釜(49・50)、瓦質土器深鉢、瓦等15世紀頃の遺物が出土した。南北溝201と同様、耕作に伴う溝と考えられる。

土坑203

古墳周濠の東側平坦面部分で検出した。周濠埋没後開削される。東西約2.2m・南北1.2m以上・深さ約1.1mを測り、平面は歪な円形を呈する。底部は湧水層まで達する。素掘りの井戸である可能性が考えられる。

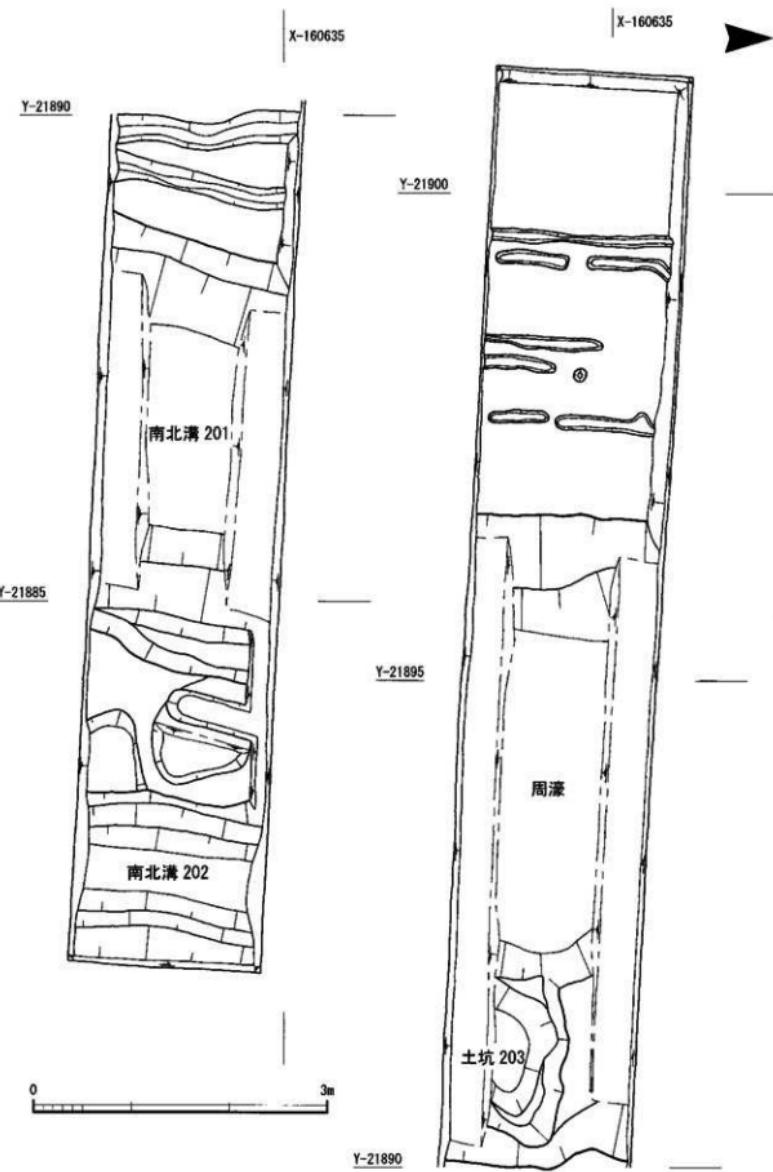


図5 第2調査区遺構平面図 (1/50)

第2調査区北壁

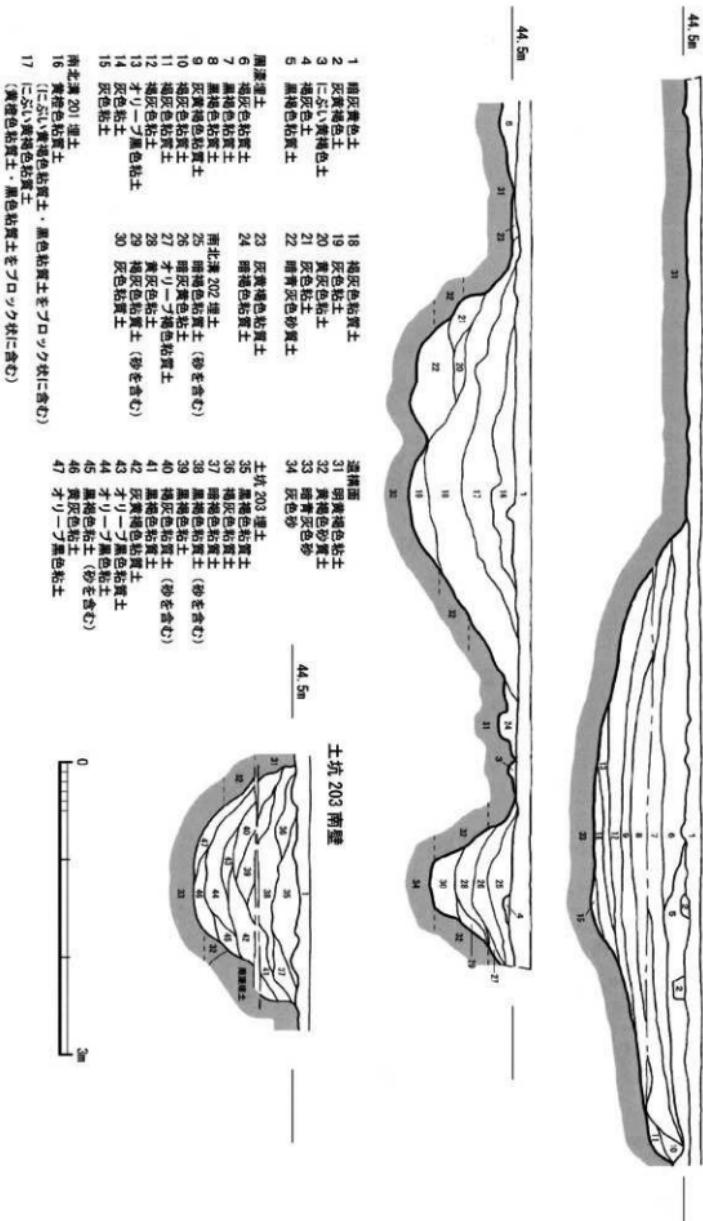


図 6 第2調査区北壁土層断面図・土坑 203 南壁土層断面図 (1/50)

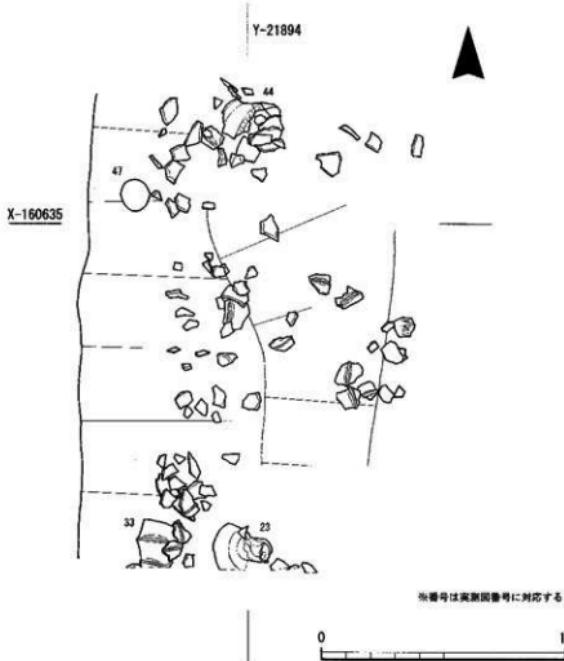


図7 第2調査区周濠内遺物出土状況図（填丘側 1/20）

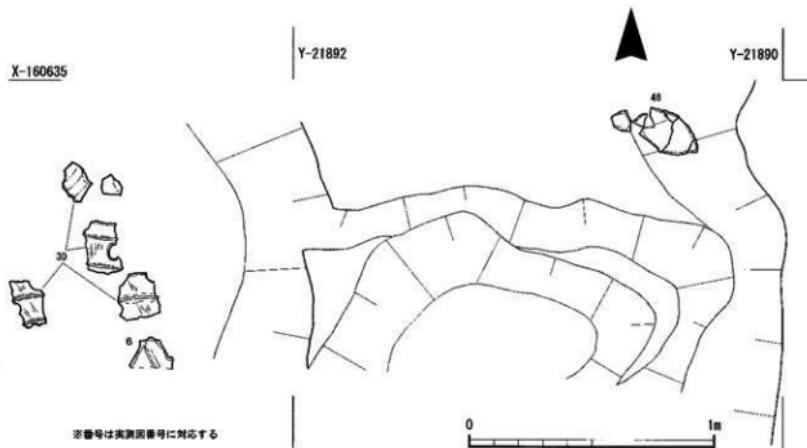


図8 第2調査区周濠内遺物出土状況図（中央～東 1/20）

3) 第3調査区（図9）

墳丘の南側、推定される墳丘主軸と直交する位置に設定した南北8.6mの調査区である。耕土・床土の下層、現地表下約25cm、標高約44.6mで明黄褐色粘土の遺構面に達する。この面で南北方向の素掘り溝の他、古墳周濠、溝を検出した。墳丘は著しく削平を受けており、盛上等は検出しなかった。

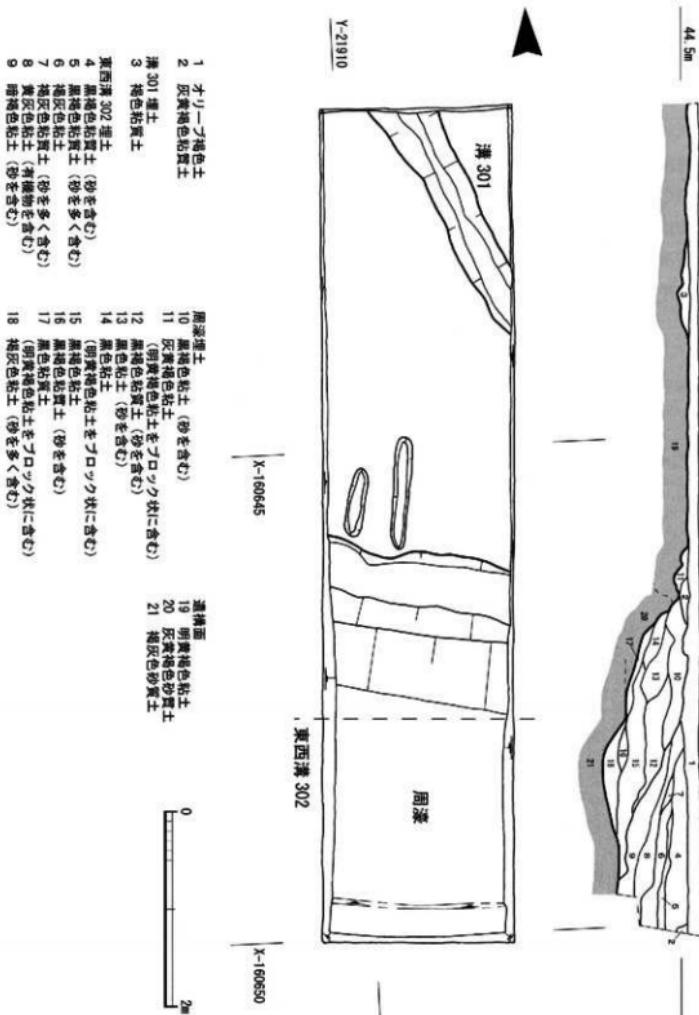


図9 第3調査区遺構平面図・東壁土層断面図 (1/50)

古墳周濠

調査区北端から西側で約4.35m、東側で約4.7m、現状の墳丘裾から6～7m南方で検出した。墳丘基底部は標高約44.0mで、墳丘斜面は約24度の角度で傾斜する。周濠外側は調査区内では検出しなかつた。第1・第2調査区同様、葺石は検出しなかった。

周濠の深さは現状で約88cmを測る。埋土は黒褐色粘質土～粘土・黑色粘土・褐色粘土が堆積する。遺物は墳丘斜面から20～30cm浮いた状態で上師器、形象埴輪（7・21）、円筒埴輪片（33・35・37・38・40）が出土している。また、調査区西壁内からは分離型入母屋造家形埴輪の寄棟部分（4）が天地逆になった状態で出土した（図10）。その他、形象埴輪（11・18～20・26）が出土した。

溝301

調査区の北側で検出した。北から約30度西側に振る。幅41～52cm・深さ約15cmを測り、長さ2.6mに亘って検出した。埋土は褐色粘質土が堆積する。遺物は出土せず、時期は不明である。

東西溝302

周濠埋没後に開削された東西方向の溝である。平面では検出できなかった（第4～9層）。第4調査区の東西溝と同一の遺構と思われる。上幅2.2m以上・深さ約71cmを測る。南北溝201・202と同様に水田耕作に伴う溝と考えられる。埋土内から土師器釜、須恵器、半瓦等14世紀頃の遺物が出土した。

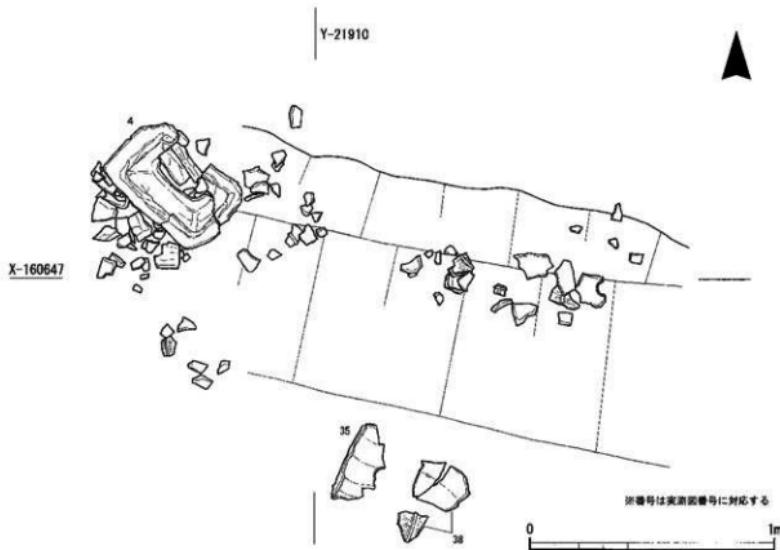


図10 第3調査区周濠内遺物出土状況図（1/20）

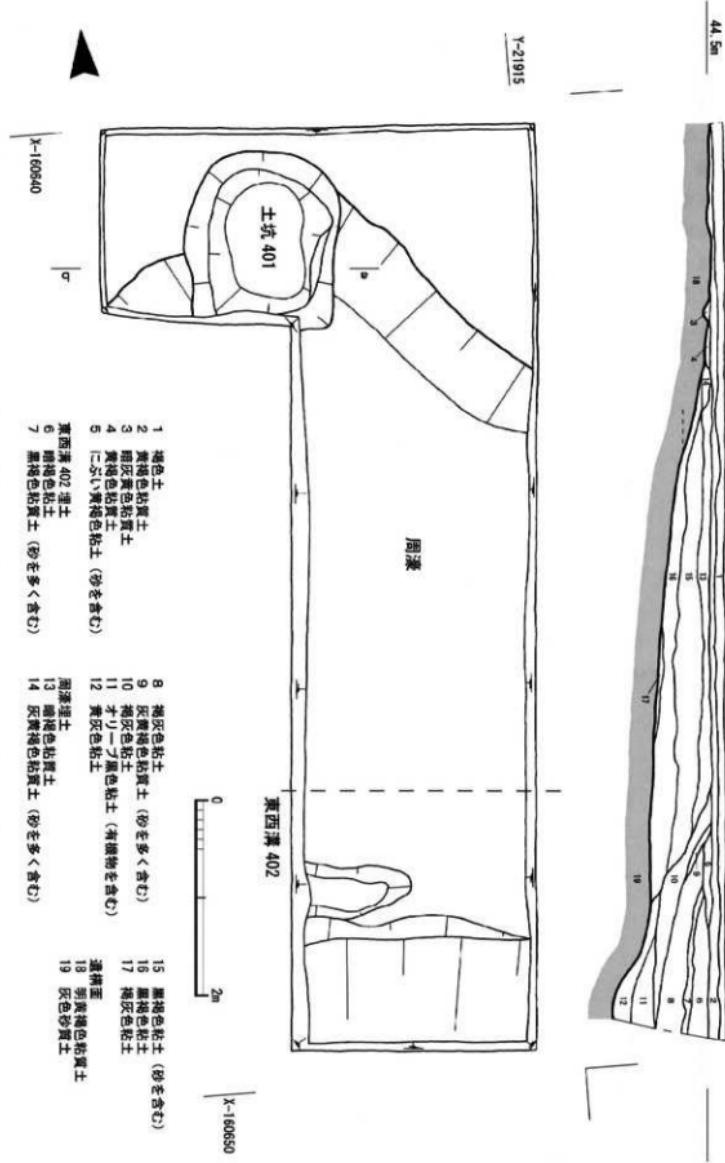


図 11 第4調査区遺構平面図・東壁土層断面図 (1/50)

4) 第4調査区（図11）

南側のくびれ部を検出する目的で設定した調査区である。南北9.5mで設定し、北西部を1.5m×2mで拡張した。耕土、床土の下層、現地表下約30cm、標高約44.5mで明黄褐色粘質土の遺構面に達する。この面で古墳周濠を検出した。墳丘部分は既に削平を受けている。機械掘削時に石包丁片（57）が出土した。

古墳周濠

調査区東側で北端から南方に約2.5mの位置で検出した。この部分から北西に向かって緩やかに円弧を描きながらくびれ部に達し、南西方向に延びる。深さは約63cmを測り、第1～3調査区で検出した周濠と比べて浅い。墳丘斜面の傾斜角度は約9.5度で非常に緩やかに立ち上がり、墳丘基底部の標高は44.1m付近と思われるが明確ではない。

埋土は、暗褐色粘質土・黒褐色粘土がほぼ水平に堆積する。

遺物は、くびれ部寄りの後円部斜面で円筒埴輪（42）と共に武人埴輪（1）が10～20cm浮いた状態

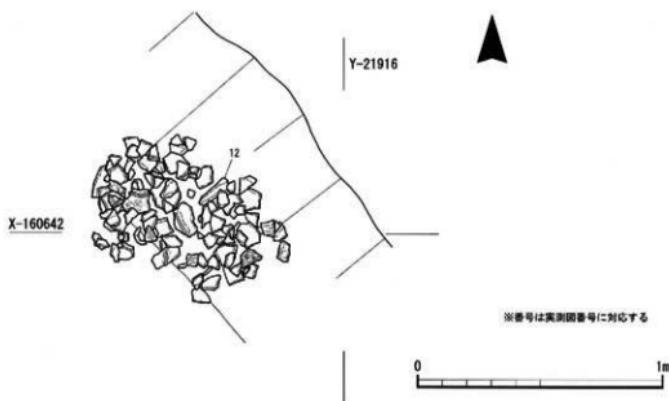


図12 第4調査区周濠内遺物出土状況図（1/20）

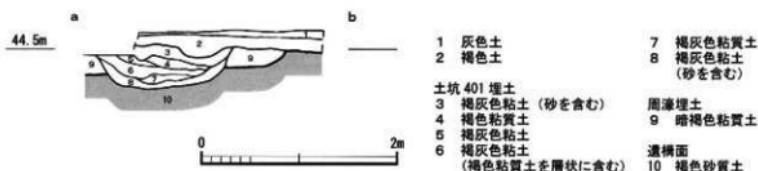


図13 第4調査区 土坑401南壁土層断面図（1/50）

で出土している。形象埴輪（12）は、この武人埴輪と混在して出土していることから同一個体と思われる（図12）。その他、埋土中から上師器杯（48）、須恵器甌（53）が出土した。

土坑 401（図13）

調査区北西部から拡張部で検出した。南側くびれ部を削平する。平面は至な梢円形を呈し、南北約1.95m・東西約1.55m・深さ約46cmを測る。埋土は褐色粘質土～粘土・褐色粘質土が堆積し、円筒埴輪片・朝顔形埴輪片が出土している。

東西溝 402

周濠埋没後に開削された東西方向の溝である。平面で確認出来なかった（第6～12層）。規模は上幅2.6m以上・深さ約1.1mを測る。第3調査区の東西溝302と同一の遺構と思われる。

5) 第5調査区

前方部の規模を確認する目的で、第1次調査の調査区西側に接して設定した東西11.4m調査区である。耕上・床土の下層に褐色粘質土・褐色粘質土が堆積し、現地表下約40cm・標高約44.4mで遺構面に達する。遺構面は調査区西側で黄褐色粘土・以下東側に深くなるに従い灰褐色砂質土・暗黃褐色砂質土となる。調査区中央で周濠と思われる落ち込みを検出したが、前方部基底部・斜面は検出しなかった。その他、西側で東西方向の素掘り溝、中央で南北溝、東側で土坑を検出した。

古墳周濠

調査区東半部で検出した周濠状の落ち込みである。現状で幅5.3m以上・深さ約55cmを測る。底部は標高約43.9mで、第2調査区で検出した周濠外側の斜面と比較して非常に緩やかに立ち上がり、基底部分も明確ではない。調査区東端で緩やかに立ち上がるが、第1次調査の調査区西端には南北溝が開削されているため前方部の状況は不明である。ほぼ水平に堆積する黒褐色粘質土・暗褐色粘土・褐色粘土が他の調査区で検出した周濠埋土と類似しているため、この落ち込みを前方部側の周濠と考える。埋土中からは土師器、須恵器、円筒埴輪等の細片が少量出土したのみであった。

南北溝 501

調査区中央で検出した。幅58～70cm・深さ約15cmを測る。埋土は、黒褐色粘質土が堆積する。土師器高杯脚部（51）、須恵器、円筒埴輪片が出土した。

土坑 502

調査区東側で検出した。東西約2.65m・南北1.2m以上・深さ約27cmを測る。

6) 第6調査区

第5調査区と同じく前方部の規模を確認する目的で、第1次調査の調査区西側に東西約13.5mで設定した調査区である。耕土・床土の下層に暗オリーブ褐色粘質土・灰黄褐色粘質土・褐色粘質土・暗褐色粘質土が堆積し、西端では現地表下約50cm・標高約44.3m、東端では標高約44.2mで明黄褐色粘質土・黄灰色砂質土の遺構面に達する。この面で周濠と思われる落ち込みを検出したが、前方部は検出しなかった。他にピット、南北溝を検出した。

古墳周濠

調査区西端から東側に約5mの位置で検出した落ち込みである。9.5m付近で僅かに立ち上がる。第5調査区同様、ほぼ水平に堆積する黒褐色粘質土・灰黄褐色粘質土が他の調査区で検出した古墳周

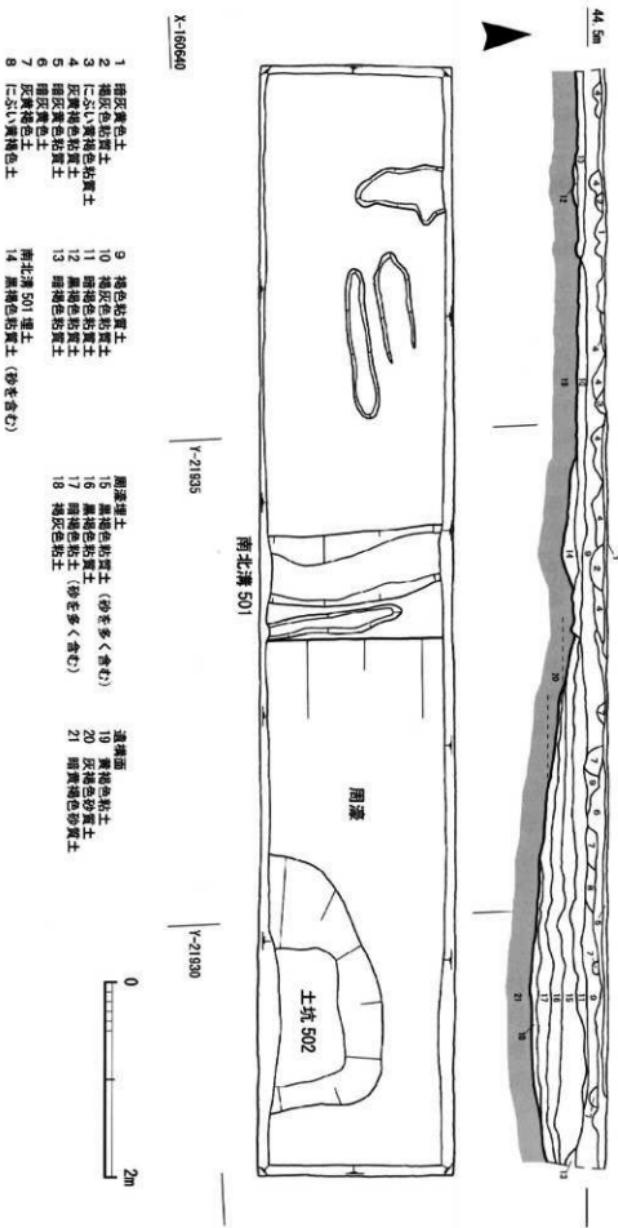


図 14 第5調査区遺構平面図・南壁土層断面図 (1/50)

濠埋土と類似することから、この落ち込みを前方部側の周濠と考える。底部は標高約44.1mで、外側に約20度の傾斜で立ち上がる。

遺物は中央やや西側で人物埴輪（2）、叔形埴輪（13）、形象埴輪（22）、円筒埴輪（41）等が地山直上からまとまって出土し、やや離れた位置から人物埴輪（3）が出土した。

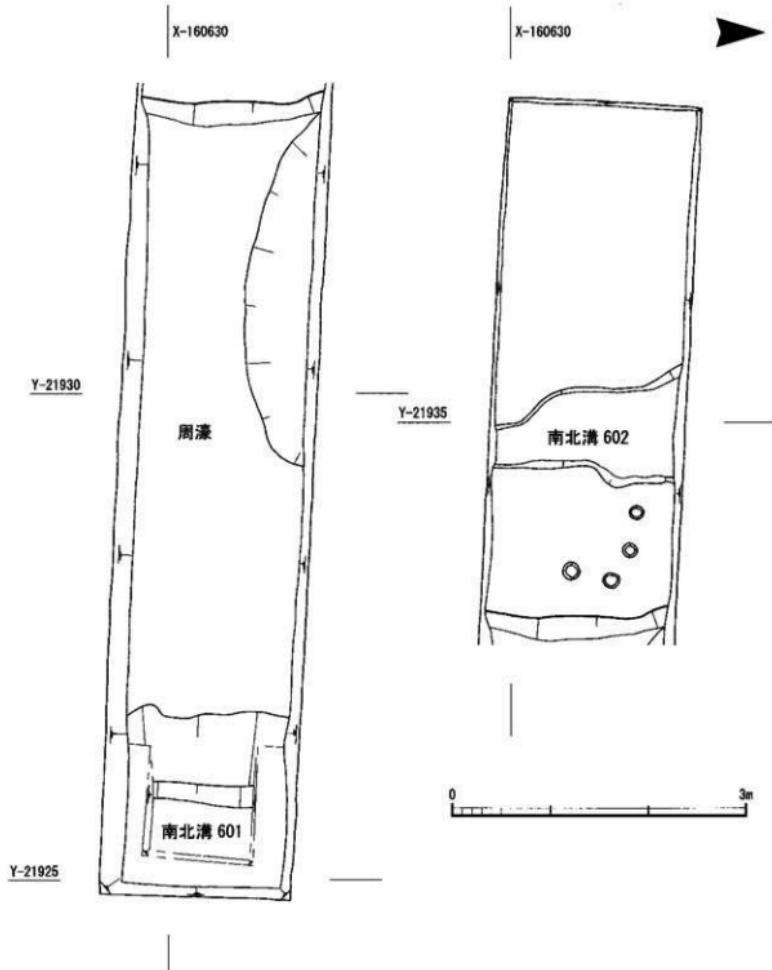


図15 第6調査区遺構平面図 (1/50)

南北溝 601

調査区東端で検出した。第1次調査の調査区西端で検出された道路側溝の西半部と考えられる。全体の規模は幅約4m・深さ約1.1mを測る。埋土は、上層に暗灰黄色粘土、下層に灰色粘土が堆積する。土師器、須恵器、円筒埴輪等が少量出土した。

南北溝 602

調査区西側で検出した。幅0.45~1.25m・深さ約0.45mを測る。埋土は黒褐色粘質土が堆積する。

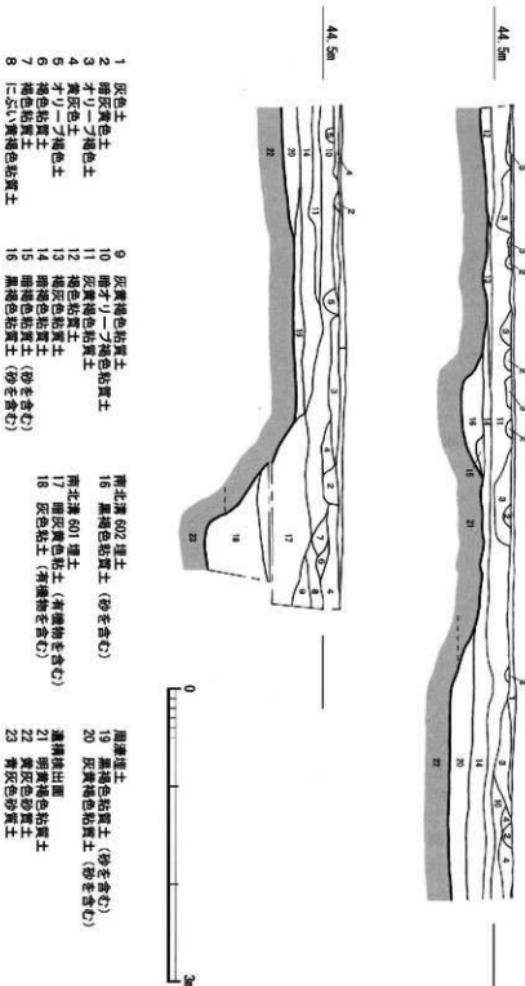


図16 第6調査区南北溝断面図 (1/50)

7) 出土遺物

(1) 形象埴輪 (図18~21)

武人埴輪 (1)

第4調査区の周濠内から出土した。体部のみ残存する。挂甲を着用し、頭甲・肩甲は着けていない。両脇の下に円形の透かし孔を穿つ。

挂甲の正面・背面上端部は体との境目に粘土紐を貼り、下部をナデて本体と一体化させることにより段差を表現する。縁に並行する沈線を入れ、刻み目を付ける。両肩部分は薄い粘土板を貼り付けて正面・背面をつなぐ。左肩上面には沈線を横4条・縦5条、右肩上面には横3条・縦7条刻んでいる。

小札は縦方向を2条の沈線で、横方向を上向きの弧線で区画し、四隅に威紐を表現する方形刺突を配している。横方向の弧線は、下から2段分は正面・背面共にほぼ同じ高さだが、正面の左脇の下から始まる3段目は背面側の右脇の下に向かって徐々に高くなっている。以後、正面3段目より上段は同様に左から右に螺旋状に高くなっていくと思われ、背面5段目は左から4行目で終わっている。

腰部はくびれ、小札の縦方向の区画が沈線1条となり、小札の幅も体部より狭くなる。

頭には首飾りを付ける。玉類だけで構成され、紐の表現はない。正面中央に勾玉1個を配し、この左右から丸玉2個・管玉1個の組み合わせで3組ずつ貼り付け、更に丸玉2個を1組ずつ付けた後、背面中央に管玉1個を配する。

全体的に丁寧で立体的な作りである。

人物埴輪 (2・3)

共に第6調査区の周濠から出土した。

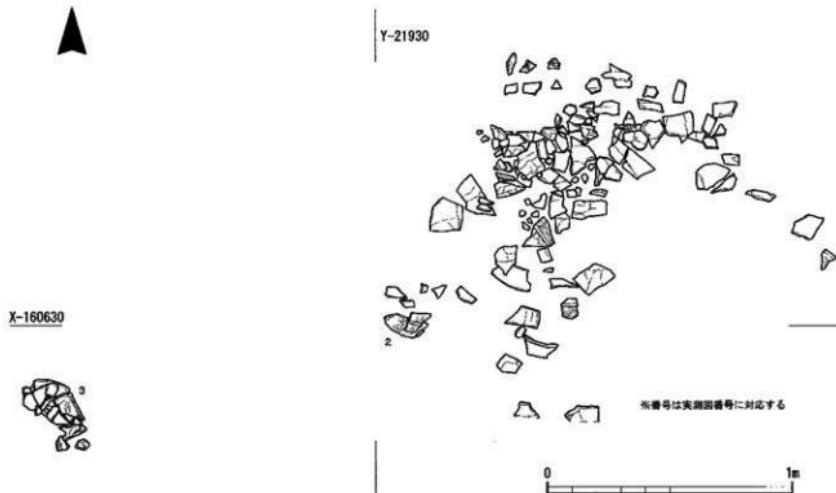


図17 第6調査区周濠内遺物出土状況図 (1/20)

2は腰部と思われる。上下方向に広がる。両脇の下に円形の透かし孔を穿つ。上衣は段差を付けて左肩に合わせる表現をするが、結紐はない。腰部に幅の広い粘土帯を貼り付けて帯を表現する。正面中央は一体化した方形垂帯を下げる沈線を刻む。沈線全体の構成は長方形で、上辺は左右に大きく伸びる。上半部は上辺左から右下角部に向かって斜線を2条入れ、この斜線を繋ぐように4条、右辺・左下角部に向かって二重沈線を刻む。下半部は上辺中央から左右辺に向かって湾曲した二重沈線を伸ばし、この湾曲線をつなぐように横方向の沈線を2条刻み、更に下方へ二重沈線を2組伸ばしている。

3は脚部である。袴はやや膨らみ、膝下に幅の狭い粘土帯を貼り付けて足結を表現する。結紐の表現はない。つま先部分を欠く。

家形埴輪（4～6）

4は第3調査区の周濠内から出土した。分離型入母屋造りの寄せ棟部である。結合部分は切妻部を支えるために内外に肥大し、差し込みの孔は梢円形を呈する。軒部分をタテハケ調整後、軒先に幅4cm前後の粘土帯を貼り付けて縁取りを加える。内面は指頭圧痕・粘土紐接合痕が残る。

5・6は第2調査区の周濠埋土から出土した。5は切妻造りの屋根部と思われる。妻側に円形の透かし孔を穿つ。6は壁体部と思われる。方形の窓部分の下に断面台形の突帯がつく。

不明形象埴輪（7～12）

7・11は第3調査区の周濠内から、8・9は第1調査区の周濠内および上面から、10は南北溝201から、12は第4調査区の周濠内から出土した。

7はほぼ直角に折れ曲がり、表面にハケメが残る。8は基底部である。ほぼ直角に折れ曲がり、側面に円形の透かし孔を穿つ。9～11は共に粘土板に粘土紐を格子状に貼り付ける。9は外面に、10は内外面にハケメが残る。11のみ器壁がやや薄く、緩やかに湾曲する。12は棒状で、円筒形のものに張り付いていたと考えられる。1と混在して出土しており、同一個体と思われる。

矢形埴輪（13）

第6調査区の周濠から出土した。長方形の矢筒部と、梢円筒形の基底部からなる。

矢筒部の両側には背板が残存する。剥離痕が基底部側面にもあり、本来は全体についていたと思われる。背板は上下で外側に広がり、輪郭に沿って二重沈線を刻む。上部はこの輪郭線の内側にU字状の二重沈線を2組刻む。右側の輪郭線に刻み損じた痕跡が残る。下部は円く抉られた後、下方に続く。

矢筒部は断面が丸味を帯びた長方形を呈し、上部、中央部、下部に分けられる。上部にタテハケ調整を施す以外は、背板も含めてナデ調整が施される。上部は逆台形を呈する。本体部分を作成後、粘土板を左右に付け足して張り出し部分を形成する。下方に湾曲する下辺は、本体の粘土紐接合痕と一致すること、正面の段差に剥離痕がないことから、本体部分の製作時に予め厚くして成形したと思われる。上辺は中央を四角く切り欠いて上部両角部を上方に突出させる。切り欠き部分の周囲は突出部分の幅で凹字状に沈線を刻み、左右辺は外側に下る斜線を4～6条入れ、下辺は平行線を2条刻む。上部全体は二重沈線で輪郭に沿って縁取り、この沈線内部に弧状の二重沈線を四隅及び下辺中央に刻む。下辺中央の二重沈線に2ヶ所、左下角部の二重沈線に1ヶ所の刻み損じた痕跡が残る。

矢筒部中央部・下部は、横帯により区画される。上部の横帯は断面長方形、下部は断面台形を呈する。横帯を貼り付けた後、矢筒部の角部に下向きの綾杉文を刻む。下部右側の沈線に刻み損じた痕が残る。上部と接する中央部の左寄りにU字状の二重沈線を2組刻む。

基底部はタテハケ調整を施し、矢筒部の下に円形の透かし孔を穿つ。

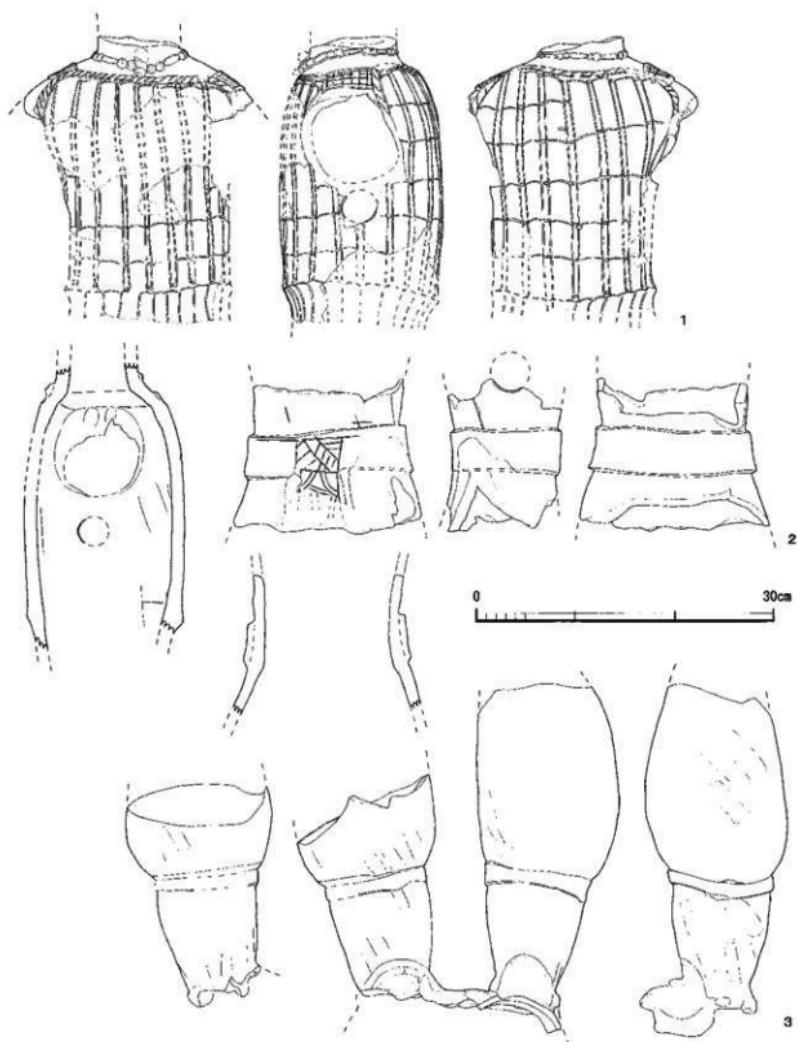


図18 出土遺物実測図 1 (1/5)

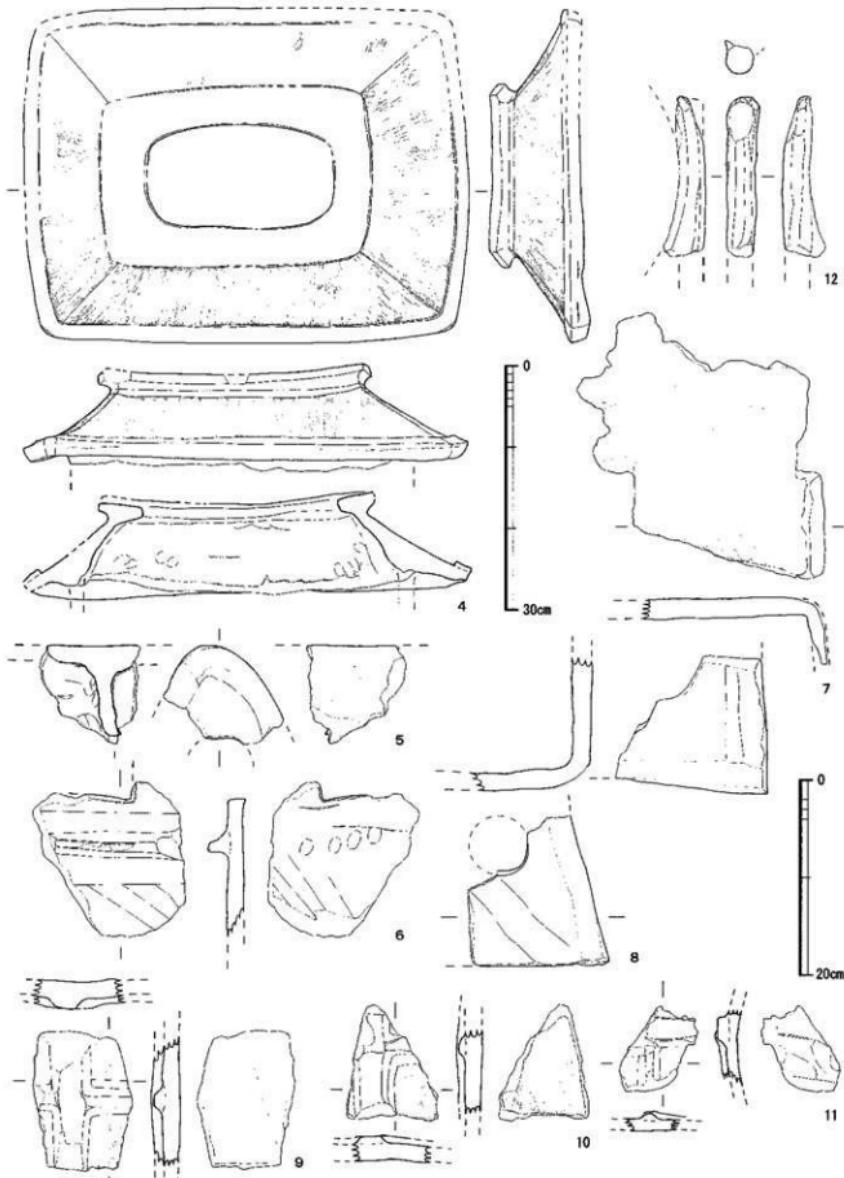


図19 出土遺物実測図2 (4=1/6 5~12=1/5)

図20 出土遺物実測図3 (1/6)

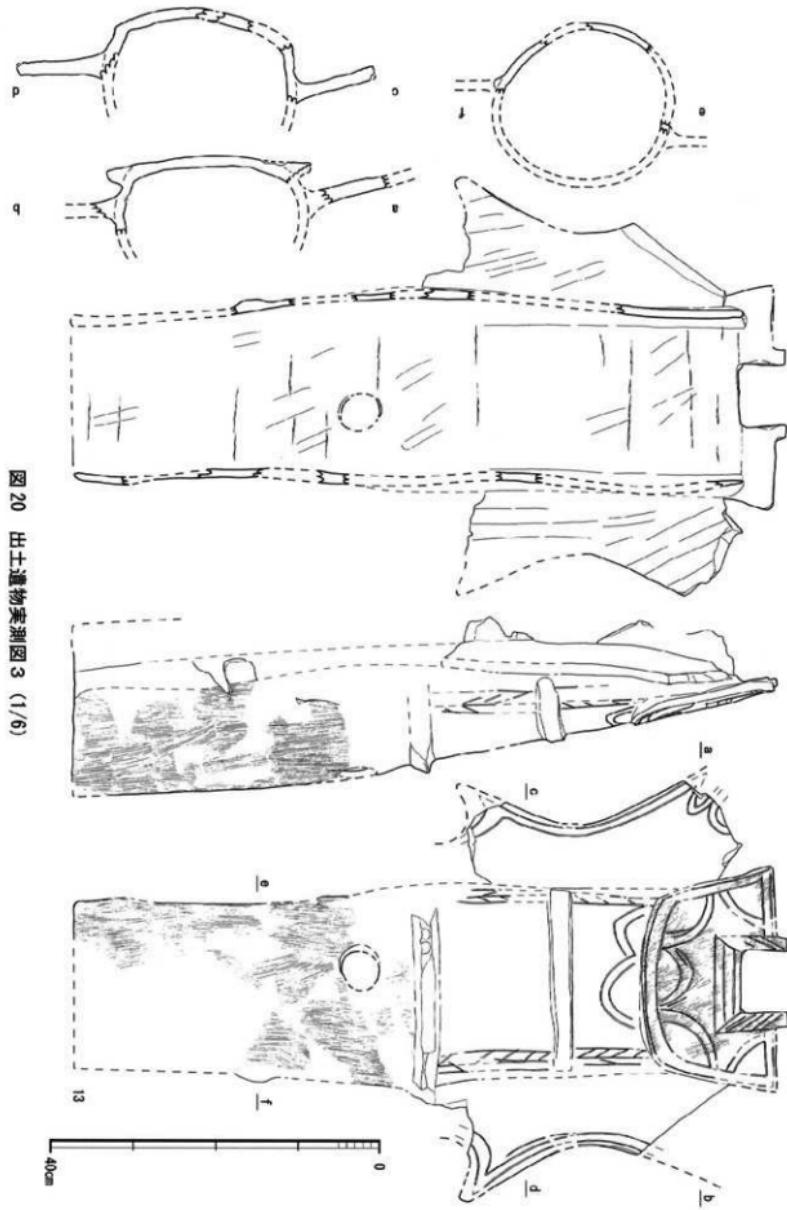




図 21 出土遺物実測図 4 (1/4)

全体的に歪で、後方、左方に傾く。

蓋形埴輪（23・24）

23は第2調査区の周濠内から出土した飾り板受け部及び軸部である。飾り板受け部には四方向に飾り板の剥離痕跡が残る。受け部内面に2個1組の貫通しない小孔が2組ある。

24は第1調査区の周濠内から出土した。笠部の縁部分と思われる。上面端部に薄く幅の狭い粘土帶を貼り付ける。

不明形象埴輪（14～22・25・26）

14～22は鱗状の破片である。14～17は第1調査区周濠内から、18～21は第3調査区周濠内等から、22は第6調査区の周濠から出土した。いずれも沈線を刻む。14は内から外に放射状に沈線を刻む。円筒形の本体側面のやや前寄りに接合する。15は二重沈線を横方向に刻む。上部は円く抉られ、下部は外側に広がる。断面が丸味を帯びた長方形の本体に接合する。16は横方向に沈線を刻む。17は上辺に沿って沈線を2条刻み、この沈線から外側下方に沈線が2条伸びる。本体との接続部分に斜格子状の圧痕が残る。18は横方向に沈線を2条刻み、上部沈線から沈線がV字状に伸びる。19は左上から右下へ、放射状に沈線が刻まれる。裏面に突帯が付く。20は二重の沈線を刻む。21は右上から左下に2重の沈線を刻む。22は左上の輪郭に沿って2重沈線を刻む。下方は幅が徐々に細くなる。

25は第1調査区周濠内から出土した。突帯がつく面から他面へ広がる凹形孔を開ける。

26は第3調査区の周濠内から出土した。S字状に緩く湾曲する体部に突帯が付く。

（2）円筒埴輪（図22・23）

すべて周濠に落ち込んだ状態で出土しており、原位置を保つものはない。全体を復元できるものはない。円筒形で口縁部のみやや外湾するもの（27～29・31・36・38・39）と、底部から口縁部へ向かって緩やかに開くもの（30・37）がある。透かし孔はすべて円形で、上下とも2段目から2方向に、以降は直交する方向に穿つ。1条目突帯は、粘土紐を器壁にナデつけたままのもの（断続ナデ技法B 32・33・35・41）と、ナデつけた後にヨコナデ調整して仕上げるもの（断続ナデ技法A 34・42）に分かれる。2条目突帯以上はヨコナデ調整して成形するが、下面の調整が不十分なものがほとんどである。外面調整はタテハケのみ密に施す。内面はナデが施され、指頭圧痕や粘土紐の痕跡が残るものもある。黒斑をもつものはない。また、固化出来なかった破片の中に須恵質のものが含まれる。

27・28は口縁部のやや下方と突帯の上方に、横方向に工具が擦れた様な痕跡が残る。

32は基底部調整時に使用した工具の圧痕が突帯にも及ぶ。

34は1条目突帯の取り付け位置が低く、透かし孔は第3段目から穿つ。他のものと比べると、第1段目の低い位置に突帯を1条加えたという感じである。3条目突帯も35と比べてやや低い位置にあり、35の2条目突帯と同じ高さには横方向の太い沈線が巡る。

（3）朝顔形埴輪（図23）

第2調査区の周濠内から出土した。全体を復元できるものはない。タテハケ調整のみ施す。

44は口縁部の破片で、粘土紐を接合する際、接合面に縦方向の刻印を入れている。

（4）土器類（図24）

46は土師器壺である。第1調査区の周濠内から出土した。底部に煤が付着する。

47は土師器碗である。第2調査区の周濠内から出土した。丸底から緩やかに立ち上がる。口縁端部は内傾している。内外面共に摩滅が著しい。

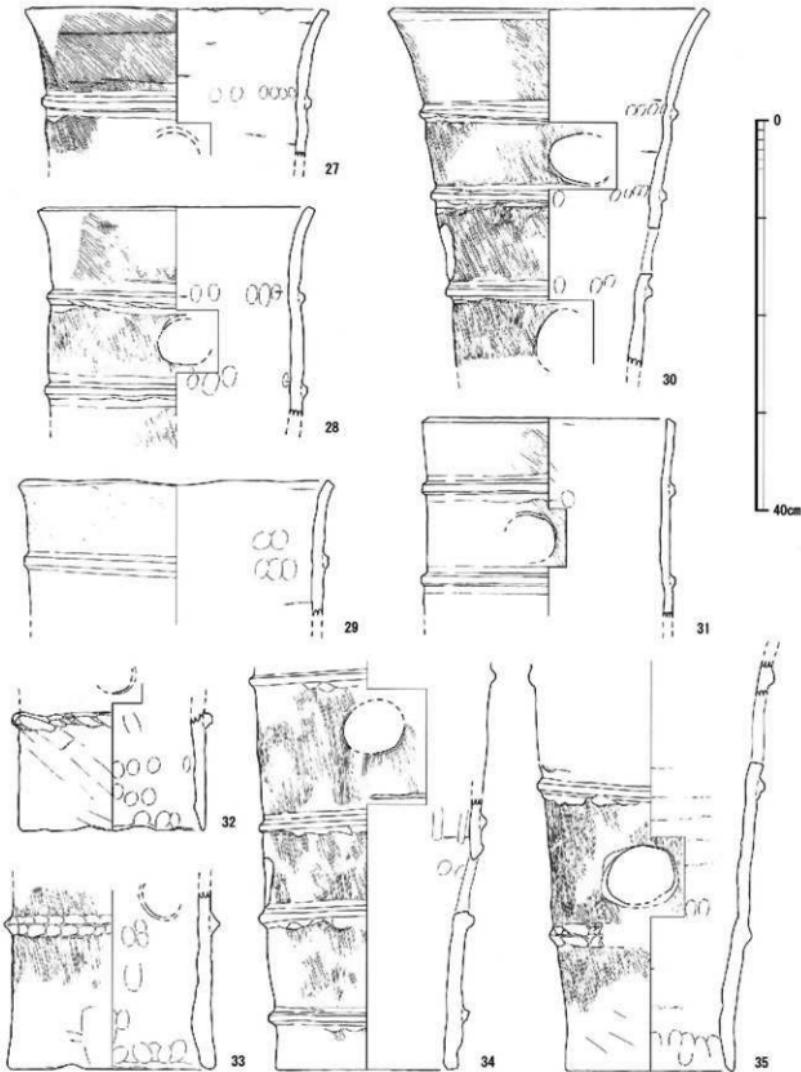


図 22 出土遺物実測図 5 (1/5)

48は土器器杯である。第4調査区の周濠内から出土した。平底で、緩やかに立ち上がる。口縁端部は丸く收まる。

49・50は土器器釜である。共に第2調査区の南北溝202から出土した。体部は球形を呈し、口縁部は内側に屈曲する。49は胴部最大径部分に、50は胴部最大径よりやや上方に幅の狭い鉗がつく。鉗より下方の全面に煤が付着する。15世紀頃。

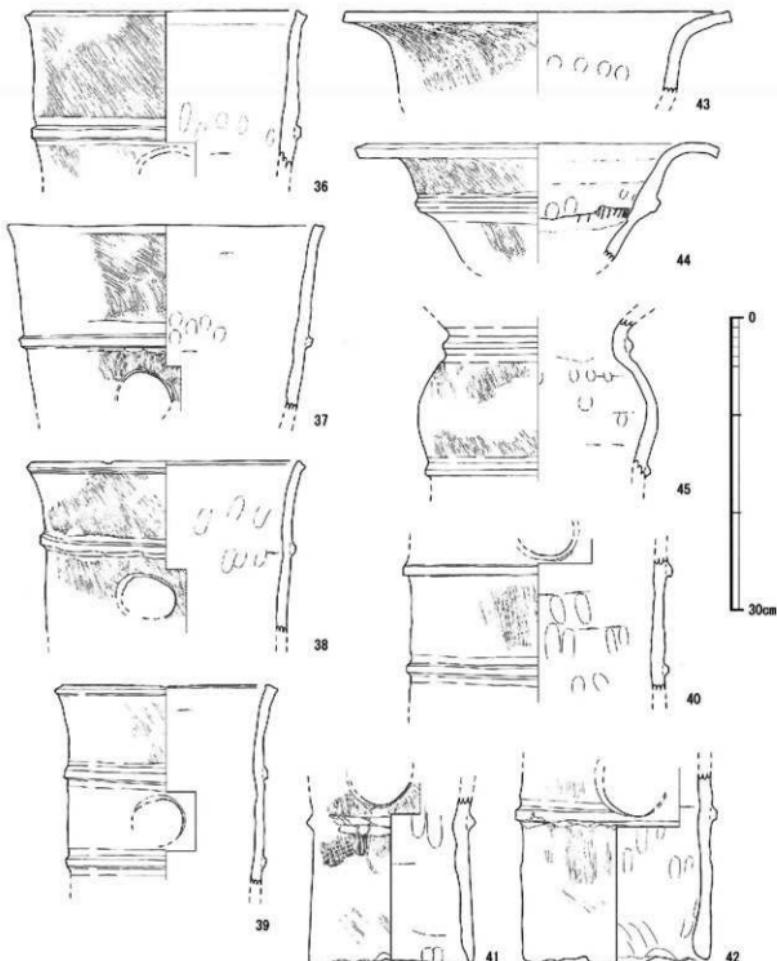


図23 出土遺物実測図6 (1/5)

51は土師器高杯脚部である。第5調査区の南北溝501から出土した。

52は土師器甕である。第4調査区の素掘溝埋土から出土した。丸底で、胸部と口頸部との境に段差がある。口縁端部は丸く收まる。把手が1組つく。

53は須恵器壺の体部である。第4調査区の周濠埋土から出土した。肩部に沈線が1条巡る。

54は須恵器壺の体部下半である。第2調査区の周濠上面から出土した。

55は瓦器椀である。第1調査区の周濠上面から出土した。半球状で、ヘラミガキ、暗文、高台はない。15世紀後半頃。

56は瓦質土器擂鉢である。第2調査区の南北溝202から出土した。平底で、体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。擂り日は櫛描きで6条1組。15世紀後半頃。

(5) 石製品 (図24)

57は石包丁の破片である。第4調査区から出土した。残存部の左側に円孔が穿たれている。

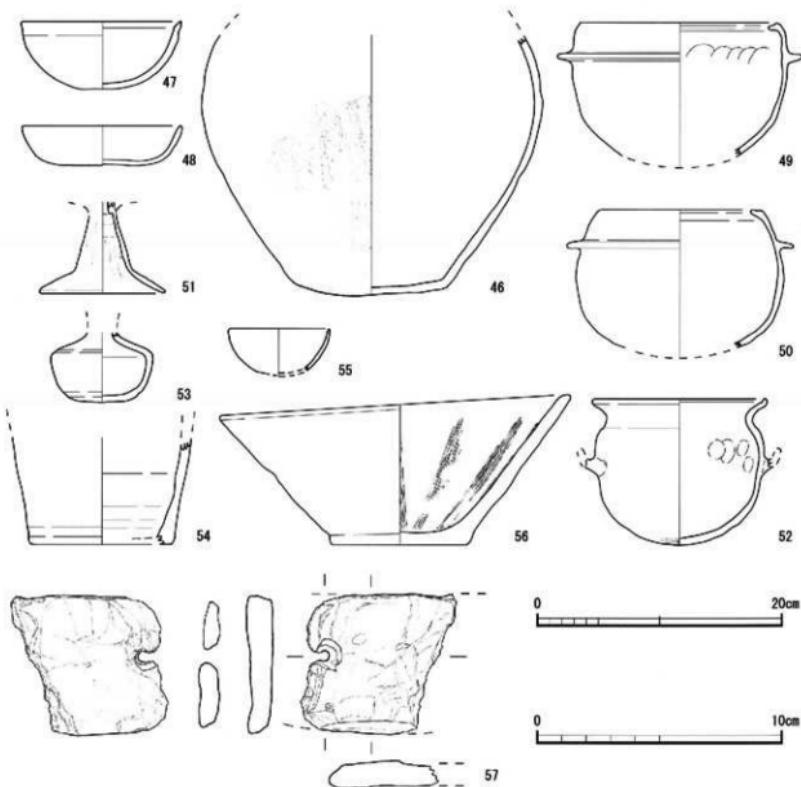


図 24 出土遺物実測図 7 (46 ~ 56=1/4 57=1/2)

4.まとめ

1) 古墳

第1・第2次調査で判明した数値を元に復元すると、まるご山古墳は西面する前方後円墳で、墳丘主軸は座標西で約4度南に振る。復元値は後円部径約24.5m・くびれ部幅10.2m程となる。前方部は第5・6調査区の落ち込みを周濠と推定し、前方部端が南北溝601で削平されたと考えると、長さ8m程となり、墳長は30.5m程、周濠を含めた全長は41m程となる。周濠は後円部側の現状で上幅約6.6m・下幅約3m・深さ90cm前後を測る。くびれ部から前方部側は深さが60~70cmと後円部側と比較してやや浅くなり、墳丘裾の立ち上がりも緩やかである。葺石は石材が全く出土しないことから築造時から施されていなかったと考えられる。

出土した円筒埴輪の全体的な特徴として、1条目の突帯に断続ナデ技法A・Bが認められること、外側調整がタテハケのみであること等から川西氏編年のV期、埴輪検討会編年のV期2段階と考えられ、築造時期は古墳時代後期と考えられる。

その後、古墳は埴輪が墳丘から転落し、周濠が徐々に埋没していく。そして、周辺が生活域として徐々に利用されはじめ、15世紀頃には南北・東西方向の溝を埋めて農地化が進み、生産域として周辺の土地利用が再度活発化していった様子が伺える。

2) 形象埴輪

武人埴輪（1）は、縦横の沈線で挂甲の小札を表現している。挂甲小札の縦線を沈線2条で表現する武人埴輪の出土例としては群馬県太田市出十品・小角田前古墳・高塚古墳・三重県藤谷窯跡遺跡、大阪府今城塚古墳等がある。横線を上向きの弧線で表現する出土例は群馬県元大田山埴輪製作遺跡、三重県藤谷窯跡遺跡、大阪府今城塚古墳等がある。特に今城塚古墳出土例は、小札の四隅に方形刺突を配するなど類似点が多い。上記の出土例を含めて武人埴輪は肩甲、籠手等を着けた重装備の例がほとんどである。対して、（1）は挂甲のみで頭甲や肩甲等を着けない。これが被葬者の階級的な身分に起因するのか、埴輪が表現する場面の違いによるものかは判然としない。

駆形埴輪（13）¹⁾は、矢筒部前面の断面が長方形を意識して作られていること、鎌の表現が矢筒部上端の正面・側面になく欠損した上部背板に描かれたと思われること、上端から基底部下端付近まで連続した鱗状の背板をもつこと等の細部の特徴から高橋氏分類の1類3式に属すると考えられる。矢筒部が横帶や綾杉文で区画されること、形骸化した直弧文と思われる二重沈線が矢筒部前面や背板に施されることも1類の特徴と思われる。しかし、現状で全体のほぼ半分を占める基底部は、同じ1類3式の山形県菅沢2号墳、滋賀県狐塚5号墳、大阪府黒姫山古墳等の出土例と比較して、全体的なバランスで考えると2類のいわゆる奴駆形の駆形埴輪に近い。両者の中間的な形態を指向して製作されたと考える。

註

1) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和を掘る19 2000年度発掘調査速報展』で石見型埴輪としたものである。埴輪検討会の方々にご教授いただいた。

引用・参考文献

- ・奈良市教育委員会「菅原東遺跡の調査 第200次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成3年度』1992
- ・奈良市教育委員会「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1991』1992
- ・川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号 日本考古学会 1978
- ・埴輪検討会『埴輪論叢』第4号・第5号 2003
- ・群馬県史編纂委員会編『群馬県史 資料編3』群馬県 1981
- ・高槻市立しろあと歴史館『発掘された埴輪群と今城塚古墳』高槻市教育委員会 2004
- ・茨城県史編纂原始古代史部会『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県 1974
- ・高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』第71巻第2号 史学研究会 1988
- ・高橋克壽「器財埴輪」『古墳時代の研究9 古墳III 墓輪』雄山閣 1998
- ・山形市教育委員会『菅沢2号墳』山形市埋蔵文化財調査報告書第6集 1991
- ・末永雅雄・森浩一『河内黒姫山古墳の研究』大阪府文化財調査報告書1輯 1953
- ・森下忠介・立石堅志「大和北部における中近世土器の様相—奈良市内出土資料を中心として—」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要1986』奈良市教育委員会 1987
- ・立石堅志「大和北部における中世土器について」『中近世土器の基礎研究V』日本中世土器研究会 1989
- ・日本考古学協会茨城大会実行委員会『関東における埴輪の生産と供給』日本考古学協会1995年度茨城大会 1995
- ・龜井正道『日本の美術346 人物・動物はにわ』至文堂 1995
- ・望月幹夫『日本の美術347 器財はにわ』至文堂 1995
- ・三輪嘉六・宮本長二郎『日本の美術348 家形はにわ』至文堂 1995
- ・高橋克壽『歴史発掘9 墓輪の世紀』講談社 1996
- ・石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究9 古墳III 墓輪』雄山閣 1998
- ・鈴村繁『人物埴輪の研究』同成社 1999
- ・瀬和夫・本端正彦編『考古資料大観 第4巻 幼生・古墳時代 墓輪』小学館 2004
- ・群馬県古墳時代研究会『群馬県内の人物埴輪』群馬県古墳時代研究会資料集第8集 2006

番号	器種	出土地区	通称名	法面 (cm) (復元時)	法面の特徴	法面の特徴	色	調査状況	備考
1	式人埴輪	4tr	周邊	眉角: (30.1)	右眼を斜めにし、小顎と側頭で表現する 頭飾り、丸玉と斧型をもつて頭部中央 に凹溝のトトに円形のあざれし跡をもつて	内面: ナデ、脚の付け根に指趾跡 脚部	淡青~褐色	5YR 8/3~7/6	体のみ
2	人物埴輪	6tr	周邊	眉角: (15.9)	脚部の下に円形のあざれし跡をもつて	外側: ケズリ	褐色	5YR 7/6~7	施墨のみ
3	人物埴輪	6tr	周邊	右足高: (25.0) 左足高: (26.2)	脚下に粘土紐で足跡を表現する	外側: ケズリ	褐色	5YR 7/7	脚部のみ
4	家形埴輪	3tr	周邊	長22 幅22 高22 底幅: (10.8)	分離式入母屋軒 縁に沿って粘土紐を貼り付ける	外面: ハケ ナデ	外面: 淡青色 内面: 淡青色 新面: 淡白色	5YR 8/2 10YR 8/3 10TR 7/1	下腹出張 部分のみ
5	家形埴輪	2tr	周邊上内 縁	縁: (10.3) (12.3)		外側: ハケ	淡青~褐色	5YR 8/4~7/6	腰? 部分 のみ
6	家形埴輪	2tr	周邊	縁: (15.4)	尖端が高い台形	外面: ハケ、斜めナデ、ヨコナデ 内面: 斜めナデ	外面: 淡青色 内面: 淡青色 新面: 淡灰色	10YR 8/2 10TR 7/2 10TR 5/1	
7	形象埴輪	3tr	周邊上縁	縁: (27.4) (23.1)		外面: ハケ	外側: 淡青色 内面: 淡青色	5YR 7/6 5YR 8/3	
8	形象埴輪	1tr	周邊	眉角: (15.4) 底幅: (14.2)	円形透かし孔	内面: ナデ、角に指趾跡 外側: ナデ 内面: ナデ	前面: 淡青色 背面: 淡青色 新面: 淡青色	10YR 8/4 10YR 8/6 10TR 6/2	基底部?
9	形象埴輪	1tr	周邊	眉角: (14.3) (9.9)	粘土紐を格子状に貼り付ける	外側: ハケ	外面: 淡青色 内面: 淡青色 新面: 淡青色	7.5YR 8/6 5YR 8/4 10YR 6/1	
10	形象埴輪	2tr	周邊上縁	縁: (11.8) (9.2)	粘土紐を格子状に貼り付ける	外側: ハケ	外面: 淡青色 内面: 淡青色 新面: 淡青色	5YR 8/3 5YR 7/5 10TR 6/5, 1	
11	形象埴輪	3tr	周邊	眉角: (8.8) (7.9)	粘土紐を格子状に貼り付ける	外側: 淡青色 内面: 淡青色 新面: 淡青色	7.5TR 7/4 7.5TR 8/1 10YR 6/1		
12	形象埴輪	4tr	周邊	眉角: (16.5) (3.4)	本体は板状	淡青~褐色	5YR 8/4~7/6		

器物番号	器種	出土地区	通称名	形態 (cm) (重宝量・施用例)	形態の特徴	作法の特徴	色	質	保存状況	備考
13	形象埴輪	6tr	周邊	高さ: 85.1 最大幅: (50.6) 瓢箪に脚付 表面に擦剝	外面: 上部と基部部はテハケ、底はナゲ 内面: ナゲ	黄褐色	10YR 8/6	40%		
14	形象埴輪	1tr	周邊	高さ: (28.5) 最大幅: (18.1) 瓢箪	表面に擦剝	表面: 淡青褐色 背面: 粉紅色 新面: 棕灰色	10YR 8/3 7.5TR 6/4 10YR 5/1			
15	形象埴輪	1tr	周邊上層	高さ: (15.3) 最大幅: (9.3) 瓢箪	表面に擦剝	ナゲ	前面: 淡青褐色 背面: 粉紅色 新面: 淡青褐色	10YR 8/6 10YR 7/6 10YR 8/6		
16	形象埴輪	1tr	周邊	高さ: (6.8) 最大幅: (7.2) 瓢箪	表面に擦剝	外側: ハケ 内面: ナゲ	外面: 淡青褐色 内面: 淡青褐色	7.5YR 8/2 7.5TR 6/3 7.5TR 8/2		
17	形象埴輪	1tr	周邊	高さ: (9.6) 最大幅: (5.8) 瓢箪	表面に擦剝	ナゲ	表面: 淡青褐色 裏面: 淡青褐色 新面: 淡青褐色	5YR 7/3/2 7.5TR 6/6 7.5TR 6/2		
18	形象埴輪	3tr	周邊	高さ: (8.3) 最大幅: (5.6) 瓢箪	表面に擦剝	外側: ハケ 内面: ナゲ	淡青褐色	7.5TR 8/4		
19	形象埴輪	3tr	周邊	高さ: (5.8) 最大幅: (6.8) 瓢箪	表面に擦剝	ナゲ	外面: 淡青褐色 内面: 淡青褐色 新面: 淡青褐色	5YR 8/4 7.5TR 6/4 7.5TR 6/4		
20	形象埴輪	3tr	周邊	高さ: (6.5) 最大幅: (7.4) 瓢箪	表面に擦剝	ナゲ	外面: 淡青褐色 内面: 淡青褐色 新面: 淡青褐色	5YR 8/4 7.5TR 6/4 7.5TR 6/4		
21	形象埴輪	3tr	周邊	高さ: (18.0) 最大幅: (9.3) 瓢箪	表面に擦剝	ナゲ	外面: 淡青褐色 内面: 淡青褐色 新面: 淡青褐色	7.5YR 8/1 5YR 7/6		
22	形象埴輪	6tr	周邊	高さ: (31.8) 最大幅: (12.7) 瓢箪		ナゲ	淡青褐色~青褐色	10YR 8/3~8/6		
23	蓋形埴輪	2tr	周邊	高さ: 17.5 最大幅: (7.6) 瓢箪	丸い底受け型・輪郭 で飾りの複合形状 受け口部内面に小孔有り	ナゲ	外面: 淡青褐色 内面: 明赤褐色	10YR 8/4 5YR 5/7	90%	

番号	出土地名	遺物名 (法尺値/高さ)	形態の特徴	接法の特徴	色	調査状況	備考
24	形象埴輪	1tr 周縁 底縁 :(15.3) :(10.5)	美器	ハケ後、ナデ	上面：黒灰色 裏面：白色 新面：棕色	5YR 6/6 10YR 8/2 7.5TR 7/6	
25	形象埴輪	1tr 周縁 底縁 :(12.6) :(5.6)			外面：黒褐色 内面：灰褐色 新面：白色	10YR 8/1 10YR 8/3 10YR 6/2	
26	形象埴輪	3tr 周縁 底縁 :(15.4) :(9.2)	前面台面で高い突起がある	内面：ナデ	外面：灰色 内面：淡紫色 新面：白色	6YR 7/6 10YR 8/3 7.5YR 6/6	
27	円筒埴輪	1tr 周縁 底縁 口径：(31.1) 口径：(31.2)	「輪郭」と島上段部の上に北朝 火葬は合形、リコッタ から2段目：円形通孔	外面：左斜めハケ 内面：輪郭直線 底面：深	外面：淡紫色 内面：紫色 新面：にがい黄色	10YR 8/4 10YR 8/6 2.5Y 6/3	口端部50%
28	円筒埴輪	1tr 周縁 底縁 口径：(28.4) 口径内：(28.5)	口部端部に花瓶を模す所施す 火葬は合形、指揮正直 上から2段目：2万円の円形通孔	外面：右斜めハケ 内面：指揮正直	外面：淡紫色 内面：紫色 新面：白色	10YR 6/8 10YR 8/6 7.5TR 7/8	口端部25%
29	円筒埴輪	1tr 周縁 底縁 口径：(32.2) 口径内：(14.0)	口部端部はナデ輪郭 突端は低い台形、ナデ輪郭	外面：左斜めハケ 内面：指揮正直	外面：淡紫色 内面：新面	7.5YR 8/6 " "	口端部25%
30	円筒埴輪	2tr 周縁 底縁 口径：(33.0) 口径内：(37.0)	口部端部は僅やかにナデ輪 火葬は合形、リコッタ 上から2~4段目に円形通孔	外面：左斜めハケ、タッハ 内面：上半部ヨコナタ、下半部クサナタ	外面：淡紫色 内面：灰白色 新面：火口色	10YR 8/4 10YR 8/1 7.5TR 5/1	口端部50%
31	円筒埴輪	2tr 周縁 底縁 口径：(25.8) 口径内：(20.4)	口部端部は直角 火葬は左斜めハケ 上から2段目：円形通孔	外面：左斜めハケ 内面：新面	外面：淡紫色 内面：新面	7.5YR 8/3 " "	口端部50%
32	円筒埴輪	1tr 周縁 底縁 口径：(21.3) 口径内：(18.3)	1条目の突出部は輪郭+ナデ輪 輪郭直線の上に火葬がある 段目に円形の通孔	外面：輪郭直線 内面：ナデ	外面：淡紫色 内面：新面	7.5YR 8/8 10YR 8/4 10YR 5.5/1	底面25%
33	円筒埴輪	3tr 4tr 周縁 底縁 口径：(19.0) 口径内：(14.8)	1条目の突出部は輪郭+ナデ輪法B 2段目に円形通孔	外面：工口によるナデ 内面：指揮正直	外面：にがい紫色 内面：新面	5YR 7/4 5YR 7/6 10YR 5/1	底面25%
34	円筒埴輪	1tr 周縁 底縁 口径：(18.8) 口径内：(14.4)	1条目の突出部は輪郭+ナデ輪法A 2段目と段間に直する2方向に円形通孔 火葬	外面：ナデ 内面：新面	外面：白色、棕色 内面：灰白色 新面：棕色	10YR 8/2 7.5TR 8/2 7.5TR 8/1	底面60%

器物番号	器種	出土地区	遺構名	形態・容積 (cm)	形態の特徴	技法の特徴	色	調	保存状況	備考
35	円筒埴輪	3tr	周溝	底径 : (17.4) 高さ : (42.0)	1枚目の表面は断面が円形で、内側は台形の外側と接する。2枚目には円形の通孔がある。丸	外面：タテハケ 内面：指揮压痕	外面：灰白色 内面：褐灰色	10YR 8/2 10YR 8/3 10TR 6/1	底高60%	
36	円筒埴輪	2tr	周溝上凹	口径 : (28.9) 高さ : (17.4)	口部は内面、外面部ははねた形で、内側は丸形の通孔がある。2枚目には円形の通孔がある。丸	外面：ムカシハケ 内面：ナデ	外面：淡青褐色 内面：灰白色	10TR 8/6 7.5TR 8/5	口端部25%	
37	円筒埴輪	3tr	周溝	口径 : (32.4) 高さ : (19.1)	表面は低い台形、工具で押せた跡がある。円形の通孔がある。丸	外面：ムカシハケ 内面：ナデ、指揮压痕	外面：淡青褐色 内面：灰白色	10YR 8/4 7.5TR 8/3 7.5TR 8/1	口端部25%	
38	円筒埴輪	3tr	周溝	口径 : (28.5) 高さ : (17.5)	「腰巻き」下に比較して、表面を高くする。円形の通孔がある。丸	外面：ムカシハケ 内面：ナデ、指揮压痕	外面：灰白色 内面：褐灰色	10TR 8/2 10TR 8/3 10TR 5/1	上端部5%	
39	円筒埴輪	4tr	複数施釉	口径 : (22.8) 高さ : (33.9)	口部端部外側の直下に次焼線1条。表面は低い台形。円形の通孔がある。丸	外面：斜めハケ 内面：指揮压痕	外面：淡青褐色 内面：灰白色	7.5TR 8/4 5YR 6/6 7.5TR 8/4	口端部25%	
40	円筒埴輪	3tr	周溝下凹	口径 : (28.1) 高さ : (18.1)	表面は低い台形。円形の通孔がある。円形の窓がある。内側に接合痕	外面：斜めハケ 内面：指揮压痕	外面：淡青褐色 内面：灰白色	7.5TR 8/3~ 2.5TR 8/6 5YR 6/6 7.5TR 8/1	肩高25%	
41	円筒埴輪	6tr	周溝	底径 : (16.6) 高さ : (38.5)	1枚目の表面は断面ナギ技法B 2枚目に円形通孔がある。丸	外面：タテハケ、端部はハケが残る 内面：ナデ	外面：淡青褐色 内面：褐灰色	7.5TR 8/3 7.5TR 8/1	底高25%	
42	円筒埴輪	4tr	周溝	底径 : (19.6) 高さ : (39.0)	1枚目の表面は断面ナギ技法A 2枚目に円形通孔がある。丸	外面：斜めハケ 内面：ナデ	外面：褐白色 内面：褐灰色	5YR 6/6~ 7.5TR 8/2 7.5TR 8/6 7.5TR 8/1	底高25%	
43	軸削影埴輪	2tr	周溝	口径 : (39.4) 高さ : (8.5)		外面：左斜めハケ 内面：指揮压痕	外面：淡青褐色 内面：褐灰色	5YR 8/4 5YR 6/4 7.5TR 8/1	口端部25%	
44	軸削影埴輪	2tr	周溝上凹	口径 : (37.3) 高さ : (12.1)	口部部は大きな外観で、表面は斜面で接合部分が露出 内面は剥離して粘合部が残る。丸	外面：左斜めハケ 内面：指揮压痕	外面：淡青褐色 内面：褐灰色	7.5TR 8/3 5YR 8/3 10TR 4/5	口端部20%	

番号	種類	出土地区	通称名	法面(㎝) (先端)	形態の特徴	抜法の特徴	色	画	経年状況	備考
45	骨頭形埴輪	2tr	周縁	高さ: (16.0)	くびれ部に断面台形の突起、ナデ	外面: 丸鉋め・ハゲ 内面: ナデ、指頭丘頭	外面: 浅褐色 内面: 新緑 新緑 - 銀灰色	7.5YR 8/4 10YR 6/1	解剖25%	
46	上飾器蓋	1tr	周縁	高さ: (21.4) 底径: (12.3)	外面全体に還が付否	外縁: タチ・ハゲ	外縁: 白色 内面: 黄褐色 新緑	SYR 8/2 7.5YR 8/2 5YR 6/6	25%	
47	上飾器輪	2tr	周縲	高さ: (13.7) 底径: (13.0)	はねかばり、深やかに立ち上がり、口縁部は内傾する面を形成	口縁部内外面ナデ	内面: 暗褐色	5YR 7/8 7.5YR 8/6	光沢	
48	土師器杯	4tr	周縲	口径: (13.0) 底径: (6.0)	平底、深やかに立ち上がる	外縁: 暗褐色 内面: 黄褐色 新緑	外縁: 暗褐色 内面: 黄褐色 新緑	SYR 6/6 7.5YR 8/2 5YR 5/8	25%	
49	上飾器蓋	2tr	側面裏202	口径: (16.0) 底径: (11.0)	口縁部は直角以上屈曲して内傾する面を形成 底部へ体部に本筋付否	外縁: ナデ、口縁部内外面ヨコナード	外縁: 白色 内面: 明るい銀灰色	7.5YR 8/2 7.5YR 8/1 7.5ZI 7/1	45%	
50	土師器蓋	2tr	側面裏202	口径: (11.6) 底径: (11.0)	「彎脚部」は屈曲して内傾する面を形成 底部へ体部に本筋付否	外縁: ナデ、口縁部内外面ヨコナード	外縁: 白色 内面: ハ	7.5YR 8/2 7.5YR 8/1 "	25%	
51	土師器蓋無	5tr	南北溝501	高さ: (10.0) 底径: (7.5)	脚部のみほぼ光沢	外縁: ナデ・しおり模	外縁: 白色 内面: 淡褐色	2.5YR 7/8 5YR 7/6 5YR 6/2	50%	
52	上飾器蓋	4tr	素盞玉土	口径: (13.8) 底径: (11.0)	口縁部は外反し、脚部は上方につまむ 体部は1対の脚部が付く	外縁: ハゲメ 内面: 口縁部内外面ナデ	外縁: 下半部: 銀褐色 内面: 上半部: 銀褐色 新緑	2.5YR 7/6 7.5YR 8/3 7.5YR 6/2	50%	
53	須磨器輪	4tr	周縲上縁	高さ: (5.7) 底径: (2.4)	周辺に沈線1条		外縁: 暗褐色 内面: 黄褐色 新緑	SPB 5/1 6R 5.5/1	20%	
54	須磨器蓋	2tr	周縲上縁	高さ: (8.7) 底径: (11.5)		外縁: ナデ	外縁: 黄褐色 内面: 黄褐色	NP 7/1 SR 6/1	20%	
55	瓦器輪	1tr	周縲上縁	口径: (8.3) 底径: (3.8)		内面、口縁部外縁はナデ	外縁: 銀灰色 新緑	N 3/ "	50%	

遺物 番号	器 種	出土地区	通称名	高さ (cm) 元標)	形態の特徴	技法の特徴	色	保存状況	備考
56	瓦質土器瓶	2r	南北201	口径 : (28.6) 底径 : (11.3) 高さ : (12.4)	平底、底面は新め下方に立ち上がる 内面に6本の筋り目	内外面ナデ	外面：黒褐色 内面：灰褐色 裏面：白色	1973.3.1 N.3/ N.8/	66%
57	石臼丁?	4r	機械部附	長さ : (6.4) 幅			青灰色	55.4.1	25%

図版 1



航空写真（上が北）



航空写真（東上空から）

図版 2



調査前状況（南西から）



調査前状況（南東から）



第1調査区 全景（遺構検出時 南から）



第1調査区 周濠内遺物出土状況（東から）

図版 4



第1調査区 全景（完掘時 南から）



第1調査区 東壁土層断面（北西から）



第2調査区 全景（遺構検出時 西から）



第2調査区 周濠内遺物出土状況（南西から）

図版 6



第2調査区 周濠内遺物出土状況（南東から）



第2調査区 周濠内遺物出土状況（中央 北から）



第2調査区 全景（完掘時 西から）

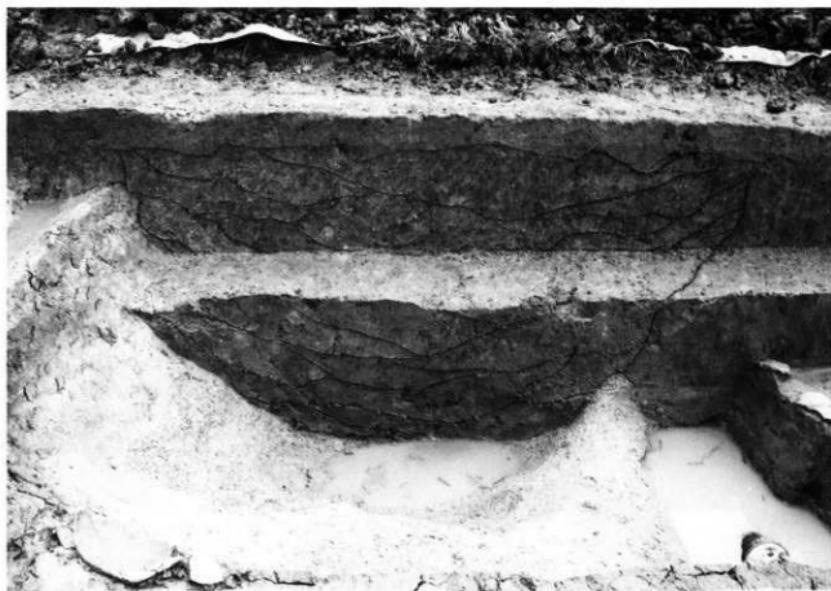


第2調査区 南北溝 201（南から）

図版 8



第2調査区 南北溝 202（南から）



第2調査区 土坑 203 南壁土層断面（北から）



第3調査区 全景（遺構検出時 北から）



第3調査区 周濠遺物出土状況（南西から）

図版10



第3調査区 周濠内遺物出土状況（西から）



第3調査区 家形埴輪出土状況（南西から）



第3調査区 家形埴輪出土状況（南東から）



第3調査区 溝301 北壁土層断面（南から）

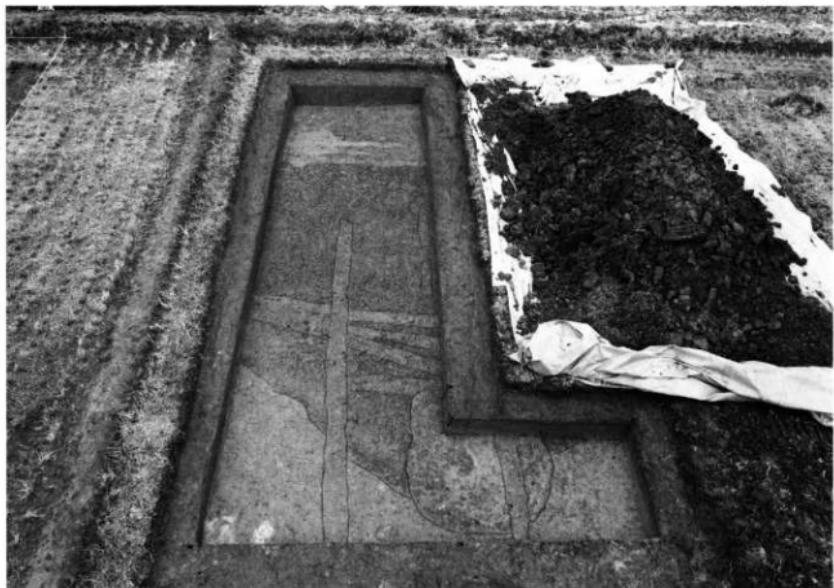
図版12



第3調査区 全景（完掘時 北から）



第3調査区 全景（完掘時 南西から）



第4調査区 全景（遺構検出時 北から）



第4調査区 周濠内遺物出土状況（東から）

図版14



第4調査区 全景（完掘時 北から）



第4調査区 全景（完掘時 南西から）



第4調査区 土坑401 南壁土層断面（北から）

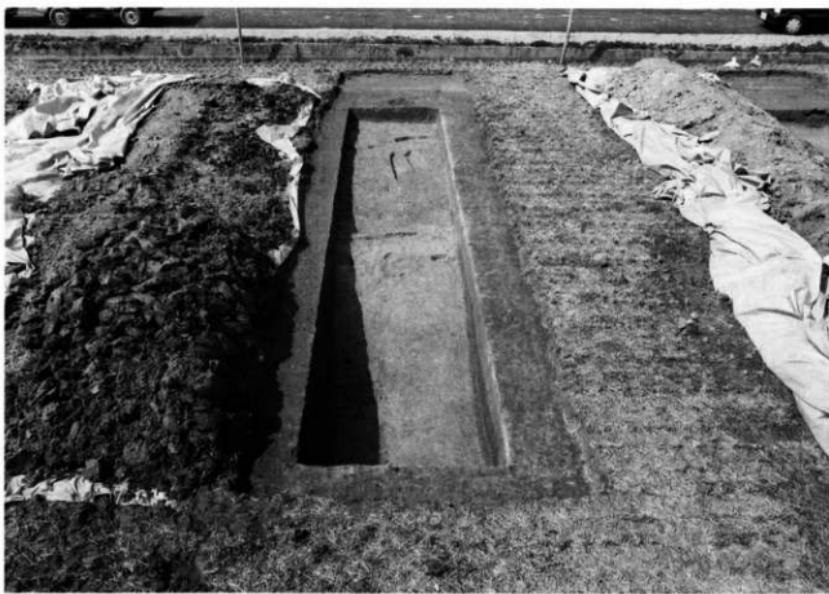


第3・4調査区 全景（完掘時 北西から）

図版16



第5調査区 全景（遺構検出時 東から）



第5調査区 全景（完掘時 東から）



第6調査区 全景（遺構検出時 東から）



第6調査区 周濠内遺物出土状況（南東から）

図版18



第6調査区 周濠内遺物出土状況（北から）



第6調査区 人物埴輪出土状況（腰部 東から）



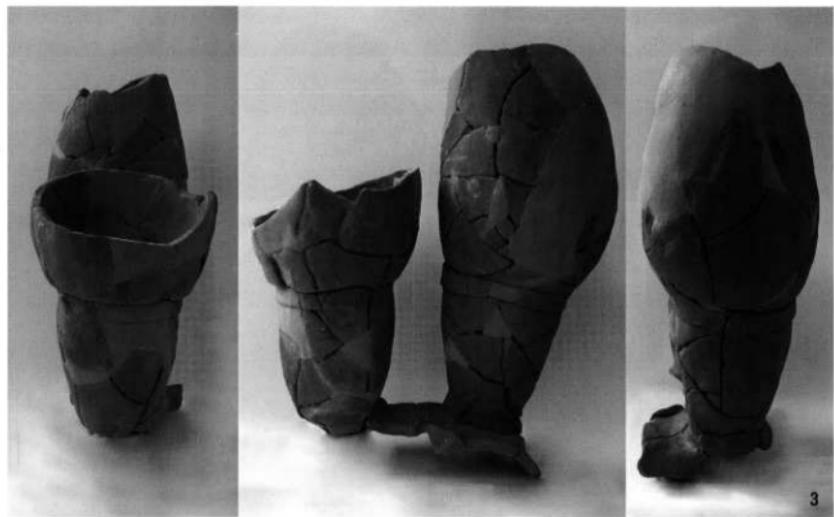
第6調査区 人物埴輪出土状況（脚部 北から）



第6調査区 全景（完掘時 東から）

図版20





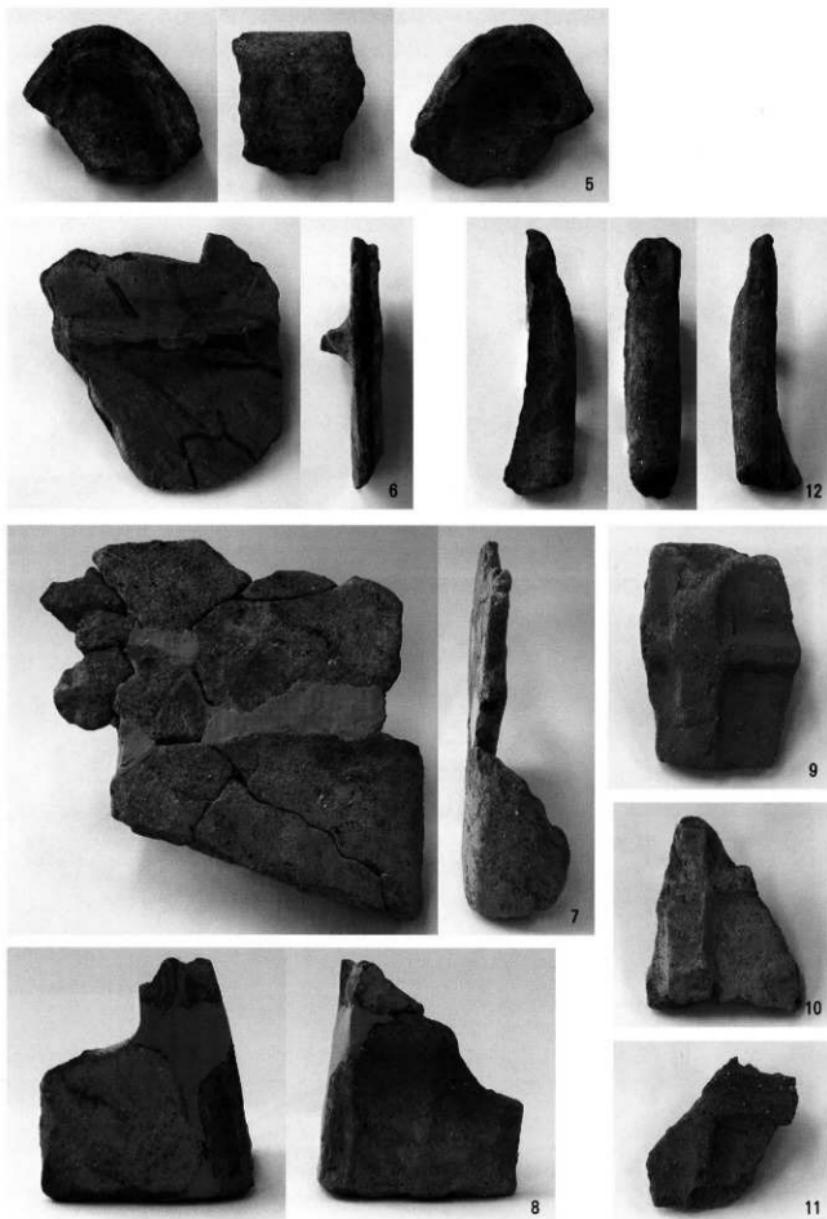
3



4

出土遺物 2

図版22



出土遺物 3

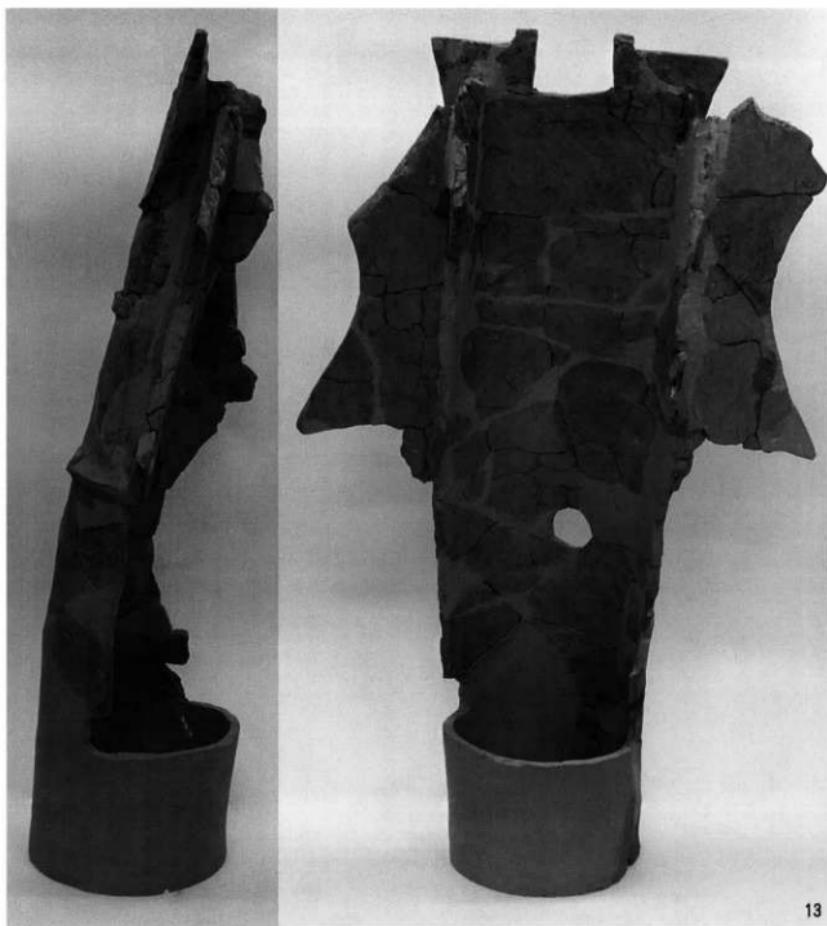


13

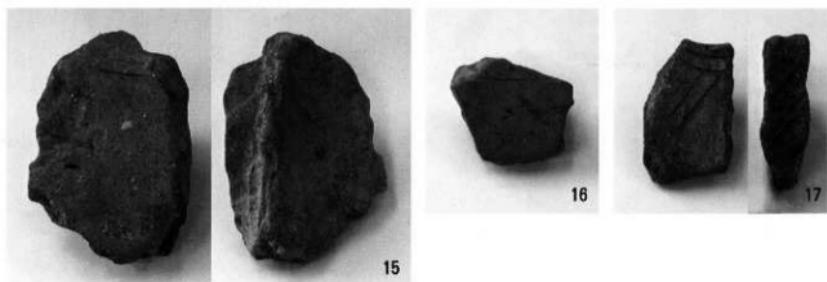


出土遺物 4

図版24



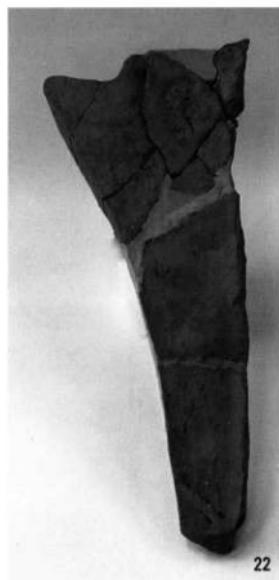
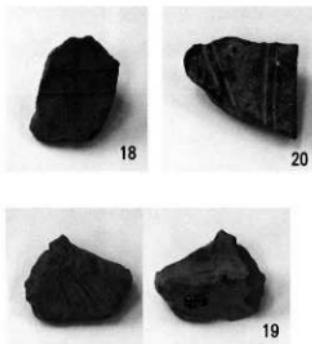
13



16

17

出土遺物 5

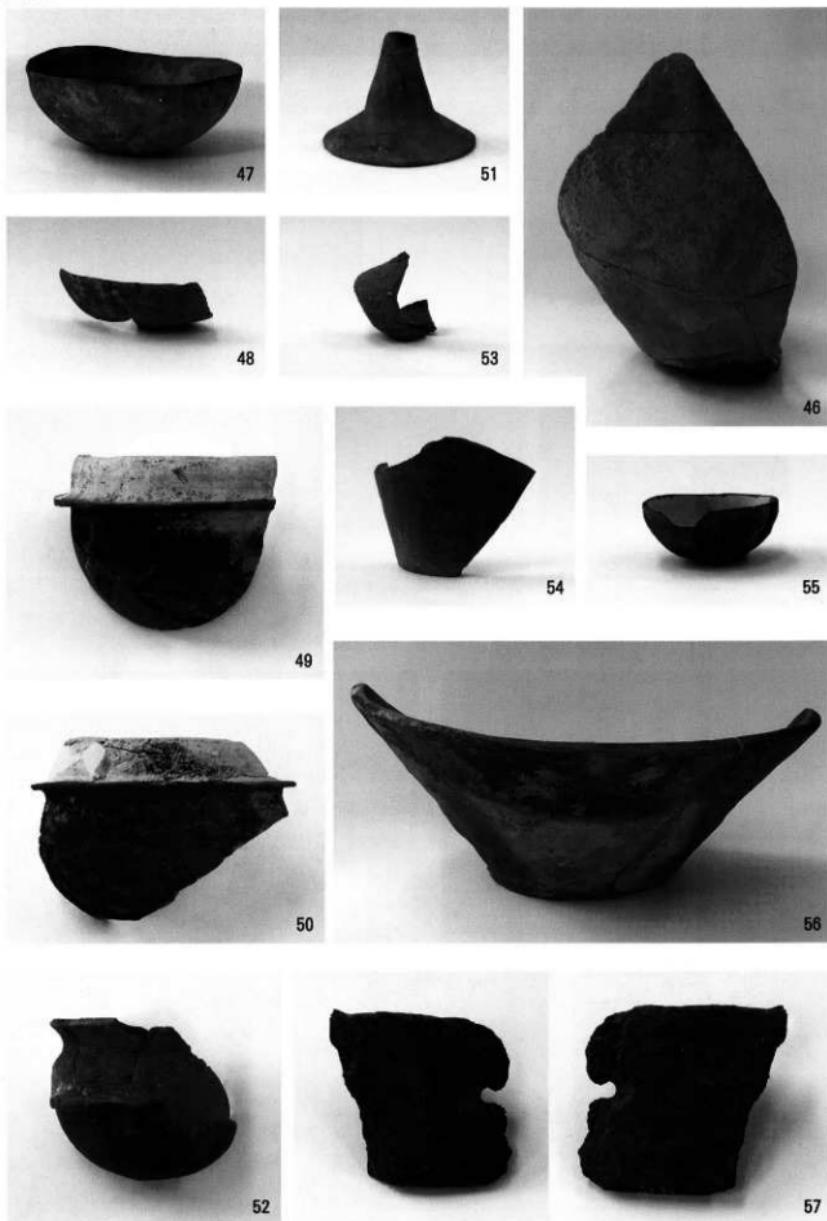


図版26





図版28



出土遺物 9

報告書抄録

ふりがな	まるこやまこふん						
書名	まるこ山古墳						
副書名	第2次発掘調査報告						
巻次							
シリーズ名	広陵町文化財調査報告						
シリーズ番号	第2集						
編著者名	名倉聰						
編集機関	広陵町教育委員会						
所在地	〒635-8515 奈良県北葛城郡広陵町大字南郷583番地1 TEL 0745-55-1001(代)						
発行年月日	平成19年(2007年)3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
まるこ山古墳	奈良県北葛城郡 広陵町大字 ローマ字 広瀬1259-1・1260	29426	11C 8	34度 33分 17秒	135度 45分 30秒	20010219 ? 20010330	範囲確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
まるこ山古墳	古墳	古墳時代後期	古墳周濠、溝、 土坑	上飾器、須恵器、 形象埴輪(武人、 人物、家、鞍、蓋)、 円筒埴輪、瓦器、 瓦質土器、石製品	前方部を削平された前 方後円墳。周濠内から 形象埴輪が出土。		

奈良県北葛城郡広陵町
ま る こ 山 古 墳
— 第2次発掘調査報告 —
広陵町文化財調査報告 第2集

平成19年（2007年）3月20日

編集・発行 広陵町教育委員会
奈良県北葛城郡広陵町大字南郷583番地1

印 刷 井上印刷株式会社
奈良県橿原市今井町1丁目5-17